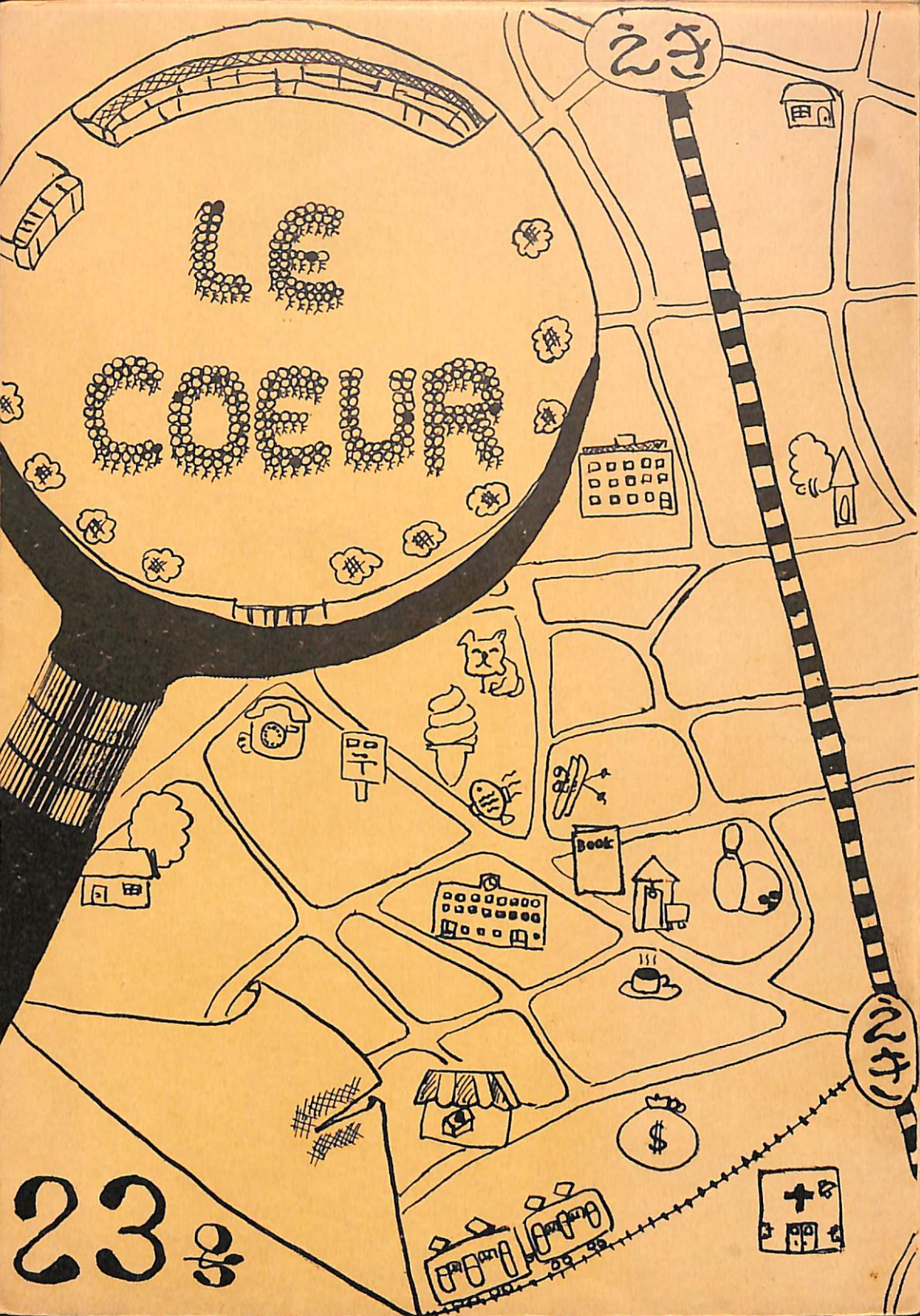
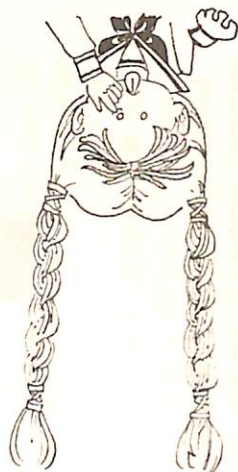


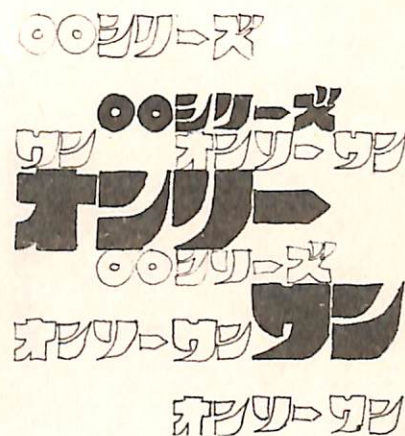




昭和50年3月10日 編集／松原高校生徒会誌編集委員会 発行／東京都立松原高等学校生徒会

第二十三号 目次

松原高校に 高校生活について	樋口 正三 荒 弘美	五 六
特集をやめて 行事ルポー体育祭・文化祭ー 生徒会報告ー委員会・クラブ活動アイウエオ順ー	編 集 部 二二 二九	一一 二九
〇〇シリーズオンリーワン 狼なんかこわくない 部屋にて 銀杏と公孫樹	二 七 八 九	二 七 八 九
溜息の春に 自己分析 朝立ち 記憶の残像ーたくらみー 夏	万木あき子 稲川 信彦 伊藤 幸子	二六 四八 四八 五四 四九



作品〇〇一

新幹線が、東京・大阪を三時間で結ぶようになったら、この短くなった五時間を、むこうでゆっくり使えるようにするのが、時代の進歩というものであった。

しかし、それを五時間早く帰ってこなければならぬようなイソガシ社会にしてしまったのは、時代の進歩どころか退歩というものであった。これでは新しい交通手段が登場すること人間はますます忙しくなってしまう。

新幹線ができることと生活が新幹線化するのな

ら、SSTができることとSST化してしまうだろう。

もともと人間は時速四キロで動く動物なのに、いまやどの交通手段も百キロ以上だから人間はただ乗せられて運ばれるだけで、ますます物質化してゆく。

そしてスピード社会のなかで、人生までスピード化させつつある。

子どもは受験勉強で競争させられるし、ママは子どもを塾に通わせ、お尻をひっぱたくし、パパはモーレツビジネスを競わされるし、レジャーというと、これまたでっかいこうで早くから予定をたて、モーレツレジャーをやりはじめる。乗り物だけが猛スピードでなく、生き方まで猛スピードなのだ。

その反省として、ゆとりを取り戻そうという「ユックリズム」がでてきたのだ。しかし、ユックリズムはただ「のんびんだらり」ではないはずだ。スピードに背を向けるだけではゆつくりを回復できない。

しかも、一人だけゆつくりとしていたのでは、受験勉強や就職試験やビジネス競争においてけぼりをくうであろう。(それでもいいだろうが。)何人かの人がユックリズムを主張してゆつくりするのでなく、世の中全体が

ゆつくりしなければいけない。

しかも、そのためのゆつくりは、ただゆつくりだけでは産みだされない。

むしろ、ゆつくりにはスピードがいるのである。イライラ生活をゆつくりさせるためには、どうしても速い乗り物や道路がある。そして、それがユックリ的手段として使われなくてはならぬのだ。

個人個人のユックリズムは個人生活の周辺でいくらでも可能だが、都市生活におけるユックリズムは、そのための交通手段や通信システム、そして情報革命があるのである。まして社会や時代のユックリズムは個人の次元でも交通システムの次元でも獲得できない。個人生活の手段と方法、そのための総合交通体系以上に、「価値観の逆転」が起こらねばならない。

そしてその結果、目的はゆつくりでも、手段はスピードになるのかもしれない。そのユックリとセッカチが触発しあって、はじめて、ユックリズム社会が可能になる。

ユックリズムが静脈思考なら、イソギズムは動脈思考なのである。この二つがたがいに新陳代謝をうながしてこそ街や国という生きものを生きつづけさせられるのだ。

つまり、ゆつくりと大急ぎは相反するものではなく、共存していなければならない。そして移動の目的と手段でそれが自由に選べてこそ「ユックリズム」は可能になる。

また、ゆつくりでも、時間的余裕をもっていても、ゆつくりする理由がなければ、いくらゆつくりできたって退屈するだけだ。急ぐ理由はすぐ見つかるが、ゆつくりの理由はなかなか見つからないものだ。

しかも、このゆつくりは、今の社会のなかで考えるゆつくりであって、本来のゆつくりは、また別の尺度を意味するものであろう。

ゆつくりすることを本来するためには、のんびりとスピードのバランスシートをつくっていかねばならない。

個人にとってののんびりと大急ぎは胎内時計で計っても、社会のバランスシート、ましてや地球のバランスシートは計るものさしがないからである。

作品〇〇二

平和のシンボルは？と、きかれたら、日本人の多くは、必ずハトだと答えるにちがいない。しかし、広い世界には平和のシンボルを

ヒツジにイメージする民族もあるし、ウシにイメージする宗派もある。ブタにイメージする国もある。ハトに平和を象徴する国々でも、若い世代は平和のデザインをハトの足に求めるし、Peaceという横文字に平和をイメージする世代もある。日曜日にピクニックをイメージする国もあれば、ごろ寝や競馬や数字……と、国によってそれぞれイメージが違う。

日本は新幹線の国でもあれば、ゲイシャやトランジスターやエコノミックアニマルの国でもあり、アメリカにはアポロの国のイメージもあれば、ベトナム戦争や自由の女神や、ヒッピーの国のイメージもある。スウェーデンは社会福祉の国でもあれば、森と湖、フリーセックス、家具と工芸品の国でもあるし、中国は毛沢東の国でもあれば、万里の長城や支那服、紅衛兵の国でもある。

そんな平和のシンボルの違い以前に、それぞれ異なった風土と独自の文化のなかで、平和そのもののイメージも異なっていくのかもしれない。

だからこそ、世界に交流と相互理解が必要なのである。つまり、ウシとブタとヒツジとハトに共通する「何か」を見いだすこと、そ

してそのお互いのイメージを尊重しあうこと、それに地球人としての共通の平和のイメージを求めてゆく——もし、それがなければ、イメージの差をもとにした戦いは永遠につづくに違いない。戦争はもはやイデオロギーの差でも、領土問題でもなく、平和のイメージの差によるマサツでしかないからである。

作品〇〇三

アポロが月に着いた時、月にウサギはいなかったが、宇宙飛行士はウサギ跳びをした。

あの荒涼とした月面で宇宙服はファンタジックで、またえらくファッショナブルであった。

しかし、この宇宙服は、ファッションとしてつくられたものではけっしてない。空気のない月面で作業をしたり、調査をするための最低条件を満たした服だった。

だが地上でファッションナブルと呼ばれる服は概して脱作業、反ビジネスな服であることが多い。労働から解放されたところにファッションがあり、ファッションとは働きにくいもの、いや動きにくいものだけを指すのである。(ジーンズは例外デス)しかし、そんなファッションは婦人雑誌の絵を飾ることがで

きて、社会を変えることは絶対にできない。
(タビタビ、ジーンズは例外)

宇宙服が、ファッション以上にファッション・ナブルであったのは、月面という極限状況で地球人が生きてゆく、環境とのきびしい対立とそれを克服した余裕があったからである。

地球上の都市にも、オフィスにも、そして工場にも、そんな対立や緊張、さらにそのうえの余裕を生む衣服が必ずあるはずだ。

クレーンにナッパ服、コンピューターに背広、スタジオにジーンズはあまりに日常的で空間に対立するところが溶けこみ、同化してしまっている。

そんなところで、たとえ背広のスソ幅が広がろうが、ネクタイの色が変わろうが、ファッションとは無関係な次元の問題になっってしまうのだ。

ファッション革命とは、背広や作業服やユニホームが変貌する生活革命のことである。しかし、それはデザイナーのクロッキーブックから起こるものでも、新しいミシンの縫い方からつくりだされるものでもない。それは背広が背広でなくなり、作業服がナッパ服オンリーでなくなることである。そして現代人のもう一つのビティ骨——ネクタイが退化喪

失してしまうことでもある。

腕まくりしてとりかかる仕事が半袖シャツを生んだように、超高速で回転する頭脳サイクルをカバーする帽子がデザインされ、裸以上にそよ風を感じる第二の皮膚としての服地が開発され、汚れこそそのカラーデザインとする作業服が誕生するといった次元で、はじめてファッション革命が起こるのだ。



松原高校に

樋口 正三

「学歴なんかは必要ではないが、学力は必要なんだよ。どんなに社会が変わるとも真理は不変だよ。そして、勉強に近道はなく、マラソン競争のようなものだよ。」

こんなに素晴らしいお言葉を全校生徒諸君に言い残して、松原高校の永遠の発展を祈りながら、自らもまた、横溢する開拓者精神を持って、新設の久留米西高校に、全く新しい学校の歴史を創造する重大な責任を果たすために、本校を惜しまれながら去っていかれた体育科の清水博夫先生の後任として、私は今年四月に杉並工業高校から参りました。

学業を卒えて、私が高等学校の教師として最初に赴任したのは、全日制の普通課程でしたが、八年間を経て、以後十六年間という長い期間を職業課程の高校で過ごしましたので、今度普通課程の本校に着任したときは、仕事は勿論のこと、総ての面で、勤めたばかりの何も解らないで夢中で過ごした時代、つまり振り出しに戻ったような気持ちでした。

だから、新任の一年生教師の私は、偉大な存在だった清水先生が去られて、抜けた大きな穴を些かでも埋めるためには、乾坤一擲しっかり頑張らなければならないぞと、内心ひそかに決意を固めました。幸いに、校長小貫先生・教頭松原先生を始めとして、本校創立以来、奉職されていらっしゃる数人の先生を含め、全教職員の慈悲深いご指導をいただき、特に体育科の橋本・寺本・益子の諸先生方の温かい友情に支えられて、いつも楽しく勤務ができて本当に嬉しく思います。アッという間に半年は過ぎてしまいました。

本校を私が最初に訪れたときの印象は、新築されたばかりの校舎なのに廊下は言うに及ばず、教室内まで塵や埃で汚ないのには仰天させられ、まだ知らなかった生徒諸君を「毎日の掃除は一生懸命にやっているんだろか」と疑いもし、がっかりしました。然し、始業式に初めて全校生徒諸君に直面して、底抜けに明るく、高校生らしい姿を目の前にして、素直で真面目、生活力も旺盛・学力向上のための余力を充分に保有していることを確め、じわじわと希望が湧き、喜びで一杯でした。綺麗に整頓された校舎で学力を増進させ、松高精神を培い、大いに個性の伸長をはかるこ

とを期待しています。

常に、私は生徒諸君には、「遅しさの中に素直さ」を求め、自分には、「優しさの中にも厳しさ」をモットーにして接してきましたが、このことは少しも間違っていないかたと信じています。一日も早く学校の雰囲気になれて、生徒諸君の最もよく理解者となり、信頼される教師になるよう努力することを願っています。

幸福に満ち溢れた諸君の学生生活は、自分だけでできるものでは決しないことを自覚して欲しいものです。責任感の強い、実践力のある立派な社会人となることに専念することは当然のこと。あたりまえのことをあたりまえに実践することが大切ではないでしょうか。清潔に、整備した環境の中で、毎日を気持ちよく過ごすよう不断的努力をしようではありませんか。諸君の日頃の生活行動を瞥見しても、恵まれた家庭・温かいご両親の心配りが付度できます。諸君は多分に、家庭でも学校でも、甘えがあり、厳しさが足りないように感じられます。無気力な生活から輝かしい将来への発展は到底望めません。清水先生が諸君に残された教訓を忘れず、教科の学習でも、生徒会の自治的諸活動においても、も

つと積極性を発揮して、より高い理想を目指し、その実現化に邁進して下さい。

高校生活について

荒 弘美

この頃はあまり使われなくなったが、つい先頃まで『親子の断絶』という言葉が使われていた。これは文字通り、親子間の断絶、つまり互いに相手の気持ちを理解しない、結局相互の会話が少なくなってきたからだと思うが、この傾向はそのまま現在の高校生活にもかぶさってきていると思う。確かに学校へ来れば友達も多く、話も気軽にできるし別に会話は少ないとは思わない。授業中にも私語は多いものである。しかしそれらの中にどれだけ親身になって打ち解けあって話す会話があるだろうか？ 実際、この頃は心を開いて話し合うという機会が減ってきたと思う。HRの時間を例にとってみても、真面目に真摯な気持ちで討議をしたクラスが十八クラス中、いったいいくつあるだろうか？ 半分もあるだろうか？ 現状は、HR＝気休めの時間or早く帰れる時間くらいにしか考えていない。

いだろう。確かにクラスというものは、入学した時、あるいは進級した時に学校側で勝手に決めたものかもしれない。しかしそうだからといって、全くバラバラであつてよいものなのだろうか？ HRの時に真面目に討議しあって、色々な人の意見を聞いてみて、何か得る所があるのではないか？ それなのに聞いてもみないで、聞いてもムダとか、意味がない、とか表面上の理由をつけて、人の意見を聞こうともしないのは、結局は自分自身に負けている『現実逃避』なのではないだろうか。まあ、時にはムダな事があるかもしれない。しかし全くすべてがムダなわけでもないだろうし、別に聞いてもたいして損はない。時間があったら聞いてもいい。それでは他に絶対有意義に使うという保証でもあるのだろうか？ しかしそれすらも例外なのであつて話し合いをする事によってコミュニケーションを造りあげる事によって必ず得る所があるはずである。しかしどうも松原高校では話し合いの場は少なく、僕のクラスでは恥ずかしい事に、一年の時から話し合いらしい事をした事は一回もない。

でも似た様なものであつて、現代高校生の共通の問題の様である。(しかしその中でも松高の状態はぬきんでていた。)しかし問題の本質は、HR等の様な団体の中にあるのではなく、それよりも小さい一歩手前の段階であるもの、つまり個人的なものにある様である。高校に入つて、新しい友達が何人もできたと思う。少なくとも多いクラスの人なら、話くらいはできると思う。けれどその中に、本当に心で話せる友達がどれだけいるだろうか？ 自分の悩みを隠し事なしで本当に打ちあけられる友達がどれだけいるのだろうか？ 中には一人もいない人がいるんじゃないだろうか？ 趣味が同じだとか、帰る方向が同じだとかいう事が、友達になる条件だろうか？ 親友とは、心で意志の通じ合える人間だと思ふ。それなら何人いたつて相手が同性だろうが異性だろうがかまわない。そんな友達を作る絶好の機会が高校生活だと思ふ。もちろん高校生活の第一の目標は、勉強ではあるが、その次に、いやそれと同じくらい親友を作るといふ事も重要だと思ふ。私はそんな友達を作りたい。

狼なんかこわくない



31DKのTNT

我が友、そして高校生活を共にしたすべての仲間へ捧げる。

アンディ・ウォーホルのキャンベルのスープレの缶みたら、しらけたツラした野郎が、ぼくの顔を見て言うのだった。「なあ、角栄と角栄団地は関係あるのか？」ぼくはきつかり一・五秒絶句したが、そいつはぼくと古いつきあいだったし、そういうのにもなれていたので、ラファエロの『アテネの学堂』のプラトンのような顔をしてあわてずさわがず三秒待って言ってやったのだ。「それは、ミック・ジャガーとアンジー・ボウイ、あるいは

五木ひろしと小柳ルミ子の関係と同一のものなのです。」と、やつは、「そのココロは、なんだね、つまり、一見アヤシイが、やっぱりアヤシイ、しかし実は無関係かもしれない君の手の内はわかってるよ明智君。」と言うから「さすが、怪人百面相。」とほめてやった。と、その時、電車が明大前のホームにはいつて来たので、我々は恐怖のグリーン車に乗ったのだった。言い忘れていたが、ここは井の頭線明大前のホームであつたのだ。やつはシートに深々とすわると、「ノブゴロド公園を建てたのは誰だ？」と聞くから、すかさず「ルーリック。」と答えてやった。と、ぼくの頭にはとつぜん、いまは無きシルバーヘッドのマイケル・デパーレスのマーク・ボランを焼直したような声があふれた。やがてそれは、デヴィット・ボウイの『ジーン・ジニー』に変わつていった。ぼくが、「本草細目」とつぶやくと、さすが怪人、「李時珍。」とかえつて来た。ぼくが「スゲェナー。」と思わずさげふと、グリーン車はいつの間にか下北沢にすべりこんでいたのだった。ぼくは「じゃあな、勉強しろよ。」といい、やつはダヴィンチのジョコンダ夫人のほほえみをうかべ、山さんのように手を上げた。晩秋の

落日は早く、風は冷たかった。ストーンスの『ウィンター』を口ずさむと、それはあまりにも空しく、空にひびくのだ。東京の夕日は安っぽくオレンジ色で、一つの雲もない空はフロ屋のペンキ画を思わせた。ぼくは重い足をひきずり、頭をひたふりするとつぶやいた。「福音書の話聞いたことがあるでしょう？ マクシリーサが知らなかったらどうなつてたんだ？」踏切のシグナルが叫んでいた。ぼくはそのおびえたような響きに戦いをいどむようにつつ立っていた、が、長くのびたその影はたよりなくガードレールによりかかっていた。「いつもこうなんだ。」と、ぼくは思った。青い線がぼくの前を駆けぬけていった。元の静けさの中を歩きだすと、ぼくの頭の中を数えきれない言葉が、うずとなつて、今のぼくを語ろうとしていた。何かを叫びたかった。しかし、その言葉のすべてに、ぼくは嫌悪感をいだいていた。青春とか挫折とか倦怠とか、そんなキラキラした言葉のおもちゃは、みんな「甘え」としか思えなかった。「甘たれてるんだ、どいつもこいつもカッパするこみたいに。」とつぶやいても、いまだぼくは十七才で、ぼくのすべてが『若さ』でありそれに根ざした『甘え』だった。

何かを振切りたかった。すべてが過剰だった。

☆NAO☆NAO☆

部屋にて

天使に連れ去られた。なぜ暗いんだ、ここは。あれはなんだ、青白い光。あの家から、もれている。人がいる。なぜ。だれだ。震えている。男だ。

そいつは、机に向かって座っていた。小柄だ。まるくなった背。つやのない長い髪。もの思いにふけている。年寄りじみている。カチャとなって火が着く音。青白い煙が、スーと細い糸が風になびくようにうずをまいて流れて、部屋が広がっていった。

何をしていますか。えっ僕ですか。考えているんです自分の事を。一体、おいくつです。十八ですよ。その年ですか。何を考えるんです。

来春実は、大学受験を目指していたんですが。父が今度の不況で、事業に失敗しましてね。それでも、いくらかの金はあるんです。僕が奔放な生活をするもんだから、信じられないと言って。末っ子だから、自由にやれないというわけですよ。

内向的なんです、僕は。学校じゃ、仲間内で派手に騒ぐから、外向的なように見られるし、僕自身思い込んだりするんですが。いざという時に、ね。だめなんです。それに移り気で、忍耐に欠けるから。自由にやりたくても、自分が不安で。

小説家になりたいんです。理想が大き過ぎるかな。なりたくても、思いやられて。独学でとなると、まったく自信がね。自分で稼いで、勉強する。独立独歩、いいとは思うけど、苦勞するだろうな。金持ちにもなりたくない。その点、天才にそこがれるな。やりたい事、パッとできますからね。それに金も。現実には天才じゃないですから、努力しなくては思うんです。不安だなあ、死にたくありません。ふと。楽でしようね。やっぱり怖い。完全な終わりだから。現状では、サラリーマンがいいな。給料が安定している。無難に、勤めあげれば、間違いない。お嫁さんも、いい人がくるでしょうね。美人のお嫁さんは、男冥利に尽きますからね。平凡だけど、幸福に、一生がおくれればね。それは耐えられない、僕には。刺激のない日常。自身の自由をけずってまで。一年の半分以上がそれだったら憂鬱だ。いい子ぶってばかり。僕の悪魔はどこ



銀杏と公孫樹

文章を書くことは非常な労力と苦痛が必要なものである。ということを確認した今日この頃。(理由はル・クルの鬼面編集者に聞いて下さい)単に文字を何の意味もなく、原稿用紙にうめていくのは誰にでもできる。文章も五行程度でやさしいものなら、まあ何とか書けるが、それから先はまるで青インクをこぼし散らしたように眼面蒼白なのである。

かなりくだらぬことを書いた。

約束の時までに原稿が出来ていれば問題は無いのだが、たいていは鬼面の様な編集者を選び倒して、ノイローゼ気味になりながら、原稿用紙をにらむ。そうしてじっとととにらんっていると、ほらほら文字が浮き出て来る、はいもう少しもう少し、段々字がはつきりしてきた。ほら文字が出たノなどという夢をみる。ねばけ眼で原稿用紙を見ると、「締切りまであと一日」という字が目飛びこんでくる。あわてて目をこすると、紙面上は真白。ヨダレのあとがあるだけである。気分をかえて風呂でも入ろうと、浴室に入ると、白いタイルが原稿用紙のマス目に見えてくる。

秋になると(近頃では秋にならなくても)、色づく「いちよう」という木がある。あの、「いちよう」という木、中国が原産らしい。「銀杏」と書いて「いちよう」と読み、「公孫樹」と書いて「いちよう」と読む。更に、「いちよう」の実である「ぎんなん」は「銀杏」と書く。国語事典というのを見ていて面白いと思うことがある。さて、「いちよう」は「銀杏」とすれば、

に行けばいいのでしよう。良心の復活は望めない。そのすばらしい、喜びを。よごれきった中の光。そのすばらしい明るさ。あこがれだな。不安の日々。売れない小説家。理想を求めて、毎日、奔放におくれますよね、きっと。でもね。

それで、ずっとこうして。考えて、いるんですね。そうですか、ハハハ……。フッフ、だから、僕はここにいます。彼の笑いが、青白く光った。その中に、引きずり込まれそうな気がした。その瞬間、自分の部屋にいた。救われた。

31B 作俣谷川



秋のものとさびしげな雰囲気になさわしく、夕陽を浴びて真黄色に黄葉した葉が風もないのにくるりくると舞い落ちていく。そんな風景が浮かびやすい。「公孫樹」と書けば、あの広大な中国大陸の青い空に、がっしりとそびえたつ大木を思わせる。

同じ言葉でも、見かた、聞きかたで随分と受けるイメージは違うものだ。たとえば、「うちの父ちゃん」といえば下町の人のいい前掛け姿のおばさんで、「宅の主人」といえば中身はどうであれ、つりあがった目をしたこわいおばさんというイメージが浮かぶ。まあ私のイメージの貧困も手伝わっているのだ。

「青春」とか「学園生活」とかという言葉は私達にとって、あまり親近感のないものになりつつある。あのゲバ学生と呼ばれまだらへルメットに角材を握りしめていた人達は、今は平凡な社会人として暮らしている人達。今何がしかの充実感を味わったことと思う。今や青春・学園生活という言葉は、テレビの中心になっただけののだろうか。

松高に来る、高校に通う目的とは何なのか先生方はいともたやすく「目的が無いなら来るな」と仰せられるが、そう言われて「ハイそうですか、二、三日考えてみます」などと

はとも言えない。言える位なら、とうに松高を遠のいているだろう。高校に来るのは何の為か？勿論、勉強に励むためであるが、わかつている私の成績は上がらないものだ。

高校生活に足を踏み入れる前は、あのテレビドラマのような生活を頭に描いていたものだった。先生というものは、少々頑固でも、生徒に理解があり、人物的には教師であり、兄であり、理想の人であり、また、友達というものは、なぐり合いの喧嘩で友情を見出し、影で見守る女生徒に恋が芽ばえ……。すべては脚本であり、現実ではない。私達が望む現実のありかた、実際の、現実の高校生活を知っているのは他ならぬ私達なのだ。実際の高校生活を脚本にして売るはずもないことだ。

八時半に学校に来て、椅子に座り、何度か立ち上がりまわりの人間をつかまえて「ビルから出る人なんていう人？」「デビルマン」あまりにくだらぬことを謀り、時にはあまりのくだらなさに口をつぐみ、四時頃にまた家へ。そして次の朝をむかえ……。

高校生活とは、これらのSスタジオのようなところで画一的にうられている安物とは違ふのだから、もっと個人的・独創的であってよ

いのである。表面にとられず、オリジナリティーにあふれたものを目指してい。そうあなたの様に石焼芋屋を理想とし、そのあこがれの時代であっていいのですよね、Nさん。べったりした友情だけじゃない、べったりしているのはゴキブリホイホイだけいい、時にはドライな友情を創ろう。自分だけのものだから、もっと高校生活を大事にしよう。

追伸 原稿料は頂けないのですか



特集をやめて

特集をやめたこと

過ぎていった時間に対し、ふり向く暇も無く、いかに時間の先取りをしようかと考えているうちに、また時間が過ぎていってしまいました。

「松高生」にとって高校生活の三年間は一体何でしょうか。(三年間で済めばの話)

まず初めは、マスコミによってあまりに誇張されて美化された「学園生活」と実際にあまりに違い、それに失望してしまうでしょう。それは、自分に対する失望でもありません。しかし、それには気付かず、多くは責任転嫁をしてしまうのです。そして、毎日毎日がただ過ぎていくのを、自分はまるで第三者を装いながめているに過ぎません。

三無主義とも六無主義とも言われているの

は私達自身ではありませんか。

不満の多い、疑問がそこら中に散らばっている高校生活をそのまま受容して流してしまふのに問題があります。

最初、私達がまだ意欲に燃えていた頃、「松高の中の私」なるテーマに取り組み、アンケートを取り、その結果は不幸にも、私達の意欲にコップ一杯ほどの水を注ぐことになったのです。それほど揺らぐ私達の姿勢を問いただされ、私達の意欲の炎を消してしまったのです。

以下続くのは、高校生活の一面を私的偏見でとらえたものです。

あなたも考えてみませんか。

まずクラブ活動

現在のクラブ活動状況は、六割程の生徒が参加しています。毎年のことながら、予算編成の時期になると、突如として活動に関するものが浮き彫りにされますが、他は別に話題にのぼりません。高校生活の中で、一番「若さ」というものを表現できるところでしょう。そのクラブ活動があまり盛んでないといえる我が校のクラブ活動・参加の是非とともに考えてみたいと思います。

クラブ活動について

クラブ活動というものは、高校生活において重要な役割をはたしている。自分の好きな事をやり、精神や身体を鍛えお互いに励まし合ったり、労わり合ったりする事のできる友をつくるなどの内容のものである。受験受験と追いまくられ、灰色とまで言われる高校生活、その生活に潤いをあたえてくれるのがクラブ活動なのである。

ところが、最近の生徒のクラブ活動の参加

状況を見てみると、多くの生徒が積極的に参加しているとは言えないようである。クラブ活動に積極的に参加しない生徒が多い原因はいろいろと考えられると思うが、やはり最大の原因は、受験の問題ではないだろうか。クラブ活動に打ち込んで高校生活を楽しく充実したものにしたいと考える高校生は多いと思う。しかし、高校生の頭の中には、常に受験の事が大きな位置を占めている。クラブに入って自分の好きな事を思うぞんぶんやりようと思っても、受験の事を考えると不安になってくるのではないだろうか。その他友人の生活と自分の生活を比較してみたり、また周囲の人の考え方など、このような事からのんびりとクラブ活動をやっているわけにはいかないと、このが、実態ではないだろうか。それと同時に、私達高校生は、はじめから勉強とクラブ活動は、両立しないと極めつけてはいないだろうか。確かにクラブの種類や活動目的などによって、練習量なども違い、そのクラブ内においても何かの役員をやるかやらないかでも活動時間に差が生じてくる。だからと言って勉強とクラブ活動が両立できないと極めつける事ができるのだろうか。クラブ活動を中止する事によってあいた時間を、きちん

と活用する事ができるのだろうか。また時間があるからと言って、内容の充実した勉強をする事ができるのだろうか。
クラブ活動を思いっきりやり、かつ、学習の面でも充実させようとするのは、並たいていの努力でできる事ではないと思う。しかしそのような厳しさの中でこそ、人間的な成長ができるのではないだろうか。また、クラブ活動に積極的に参加しない原因に、生徒の無気力化という事もあげられるのではないだろうか。

最近では私達高校生は、四無主義などと言われ、特に勉強の事以外に対して無関心になりつつある傾向がある。その結果、不活発なクラブができ、そのクラブに入っている者も、そのクラブに魅力を感じなくなってくる。したがってそのクラブは、新鮮味というものがなくなりマンネリ化してくるのである。このような悪循環の繰り返しなのである。しかし一言で四無主義をなくそうと言ってもそう簡単になくするものではない。生徒の多くは、四無主義は当然だというような居直った態度をとっているが、心の奥底ではなんとかしてこの無気力や、無感動の生活から抜け出したいと考えているのではないだろうか。今、自

分は、青春の真ただ中にいるのだから何かをしなくてはならないと考えすぎる。けれど一体どのようなしたらこのような生活から抜け出す事ができるのかわからない。だからイライラするばかりで、どうする事もできない。結局そのような事の繰り返しで、四無主義につながる原因の一つではないかと思う。ともかくあまり青春というものを意識しないことである。そして、まず何かに興味や関心を持つようにし、それを実行し、その結果が自分の身につくかあるいは、何もならずただ消費してしまっただけかもしれない。しかしそれもまた青春の一部なのではないだろうか。まず悩む前に何でもよいからやってみる事である。クラブ活動も同じように、最初に何でもよいから興味を持ち参加してみるのである。やっているうちに生活にも張りがで、充実した高校生活を送ることができるようになると思う。クラブ活動という場合は、人間形成の大切な場であり、けっして一部の生徒の活動の場ではないと思う。

授業中ではけっして得る事のできない何か(たとえば教師と生徒の心のふれ合いなど)を得る事ができるのもクラブ活動なのである。感受性が豊かで、ものの考え方や人生観など

が確立するのが高校生の時であると思う。だからできることならば、高校生全員がクラブ活動に参加するようにし、豊かな人間性をつくりあげるべきではないだろうか。

学校には必ず教師が居る

絶えず誰かの顔をみている割に、親近感というものが無い。松高の先生はあなたの理想とする先生像に合致するか、否かというアンケートを取ったところ、九割方、「失望」。後の一割も「教師に理想も何も無い」「期待などしていない」「なんと寂しいことではないか。原因はと言えば、マスコミによって描かれた先生像とあまりにかけ離れているからだ。教師と親しくなれないという生徒自らの失望ではないだろうか。」「親しく」というのはいささか語弊があるかも知れないが、自分なりに先生と付き合う、という意味で理解してもらいたい。別に教師とは付き合わなくても不自由はしないだろうが、私達より多くの経験をしてきた「ひとりの人間」として見ることはできないだろうか。世の中段々と味気なくなる中で、

ひとつ味のあるものを持ってみたい。でも、それはもしかしたら「親しみ」ではなく「嫌悪」かもしれない。

アンケート抜萃

……先生については、仲々おもしろい。理想の教師である1に對し、そうでないが3。理想の教師でない理由がいろいろ出た。

「もっと先生との密接な結びつきがほしい」「生徒と教師の間に親近感がない」など、中学校の先生と比べて、高校の先生の冷たさ、親しみにくさの面から。授業面では、「生徒が理解していないのに先に進んでしまう」「授業を事務的にやっている」「教え方が、わかりにくい」。どここの高校でもあることだ

と思う。中学校ではないので、そんなに手取り足取り教えることは、高校の先生にはできない。それは承知で入学しているのだから生徒は予習を中心にやるようにと先生方は、おっしゃる。わからないことがあったら、いつでも聞きに来ればいいというものの、生徒は、仲々行きづらいものなのだ。

「授業に積極性がない」「授業が退屈であ

る」というのは何かおかしい。授業を積極的におもしろくするのは生徒の方ではないだろうか。

先生の生徒の見方の面では、「一人の人間として大人の考えを持てる人間として見てくれない」「生徒をもっと信頼してほしい」など。これは先生方のアンケートと比べれば、おもしろいと思う。「教育に対して不熱心な先生が多すぎる(これは私たちを根っからのバカと思ってる証拠で気に入らない)」というのは、鋭い。

少数の先生に対しては、「女子が着がえているのに、平気で教室に入ってくる男の先生がいる」「お酒を飲んだまま授業に出てくる」「横暴だ」など。これには驚いた。松高に、こんな先生がいるのか。先生方は反省しなればならない。

「ハゲが多い」これは、どうしようもないので、生徒は先生に毛生え薬をプレゼントしましょう。中には、「スバルタ式をもう少し取り入れて、もっときびしく」というのもあった。すごい人もいるものだ。

「あら、先生だったの」



急に「先生のことについて書いてこい」などと言われて、私はたいへん困っているのです。なぜって……なんとなく松高の先生と言われてもじっくりこないんだなあ。各々の個性があまりにも強すぎるのかなあ。いや、それよりも——まあ高校なんてみんなそんなものなのかもしれないけど——先生と名の付く人物は、教科で習っているとか、クラブや委員会などでたまに顔を合わせる人(?)しか知らないのですよ。廊下で会ったところで、どこ

かのおじさんだろうくらいにしか思わないでいたこともあるし、まして街角や朝の電車の中で仮に会ったとしても、早々に気づいて、挨拶をするなどということは、全くないと言ったも過言ではないのですよ。こうなるとつまらないものですね。私の小学校に入ってから来校の楽しみがひとつ減ってしまった。悲しいかな。——だったら休み時間にも職員室に乗り込んで行って、先生方と親しくなるようにすればいいじゃないか。それもそうですが、でも、どういうわけか——初めが悪かったのかなあ——職員室という所は、時たまふざけに行くためのものだと思意識的に思っているらしいのですよ、この私は。

それはともかく、高校に入ったら先生への関心が極度になくなりましたね。どういうわけか。たまに授業中に先生が皆の注意を引きたいためかどうかは知らないが、馬鹿なことを言っている時がある。そんな時、ただ「あの先生、なに言っているの。頭がおかしくなったんじゃないかな。」などと内心思うだけ。小・中学校の頃は、まだしも先生の影響があったものだが、最近は全くですね。たいていの先生は、時間になったらやって来て、時間になったら帰って行く、講義ロボットと

でも申しましょうか。私にとってはそのような存在なのです。(少々きつい言い方かもしれないが。)

おぬしはそれでいいのか!

松高生となり、松高の先生方を知らぬ間に卒業するなど、許されるのか!

いや、それではいけない。そうだ、定期的に生徒と先生の意見の交換会などを行ったらどうだろう。でも、それは望めませんね。先生方はお忙しい、そのようなささいな事に大切な時間をさくことはできないでしょうし……。我ら学生は、そのようなナンセンスなことをするより、喫茶店でおしゃべりしていたほうがはるかに楽しいだろうし……。

やはり、私は(いや「私たち」かな)適当に先生を覚え、廊下などで会った時は、「あら、先生だったの。」と、適当にやっていくのが一番無難なのでしょう。

絶望的だなあ!!

Etsubo Kon

せんせ

せんせ

頃は教師が忙しくて走り回るという十二月(師走)。デメことル・タールの委員長は、しきりに原稿の催促をする。内容は「先生について」。ぼくは、何日までにかという期限が好きではないのだ。特に文章を書く場合などは。だから、いつもぎりぎりまでやらずにいて、前日仕方なく、ガッタガタコシコシと、かたづけろのだ。これも明日までに書きあげなければならぬものだ。

ふとんの中で、たばこなどくわえていず、米が三個入った「我々好き」のグラスも絶対に左手に握っていない。(……とあたかも、やっているかのように書く。)

こんな関係ない事をだらだら書くのは、何のためか。勿論、字数をかせぐためである。生まれてこのかた、ぼくが書いた文章の中で一番長いものは、一枚と三行で、「大人になつたら何になりたいか」だった。ぼくは、その頃(小学三年生だった)が、まじめに、石やきいも屋さんになりたいと思ったのだ。あの「石やきいも」という声の調子のすばら

しさ。あれこそ、ぼくの一生をかける仕事だ。そう思ったね。

あつと、こちらで本題に入らないとデメさんにしかられる。先生についてといっても、ぼくが習っている先生のことになるが。しかし、「教えてもらっていないから、その先生の名前は知らない」などといったところにも、高校の生徒と先生の間が親密でない。へだたっているなどの原因があるのだろう。

いつしかアンケートの結果に、松高の先生は、「ハゲが多い」というのがあった。確かに多い。ナンバーワンは、H先生だ。ああ、あのすばらしい頭。なだらかな山が二つ、表面はつややかに光り、中ほどには黒々とした大きなホクロが、ずでんとすわっている。授業中ねむくなつたら、あの頭をごらんさない。光が「てかー」と反射してまぶしくて目などすぐさめて頭もすっきり。まったくあの頭を見てみると、おもしろい。この世に二つとな、すばらしい頭である。

人間も七〇才を過ぎると、おだやかになるのだろうか。H先生は、やさしいおじいさんで、S先生はおもしろいおじいさんといった感じだ。(おじいさんと言ったらおこるかね。)S先生は、ローマ字の研究をしていて、ロー

マ字同好会をつくりたいそうだ。が、なかなか人が集まらないそうだ。どなたか、やってみせぬか。また、京都についてもくわしい。声だけ聞くとこわいが、教える方も親切で授業も楽しいですよ。

T先生とM先生は「おとつもん」といった感じで親しみやすさと「かんろく」がある。T先生は五人も子供がいらっしやる。さぞ、にぎやかなことだろう。だけれども、よくとばし、声の大きいことといったら、となりの教室まで響きわたる。どこにそんなエネルギーがたくわえられているのか。得意なのは、「おうおうにして……」だ。これがなくては、授業にならないのである。

M先生は、見るからにおもしろい。おなかが大きくて、すぐズボンが下がるので、ベルトをつかんで「ぐいぐい」と引っぱりあげる。そんな格好をまともに見たら、その晩は絶対ねむれない。また、一週間ぐらいいはうなされる。

女の先生の中で目立つのはK先生。先生のときすまされた美的感覚に、ぼくはとてつないてゆけない。ところで、どなたか石やきいも屋さんのおくさんになりたい人は、いませんかね。やさしくて顔は見て心臓が止まらな

い程なら、どんな人でもいいのですが。

年のはなれた「兄貴」って感じの先生は、O先生とm先生。O先生は倫社を教えているが、生徒の気持ちをよく知っていて「みんなねむそうな顔をしているから、公園に行ってバレーボールでもしよう」、こうだもんね。話せるねー。いつしかは屋上で日なたぼっこをした。女子は、サンダルを取りっこなどして、幼いっらないの。ぼくは、ひたすら、近所の「やきいも屋さん」を研究。この頃はみんな自動車になっちゃって屋台は見ないね。m先生は、おっとりして本当に音楽の先生らしい。何でも少年マガジンは毎週かかさずに読んでいた。顔が四角いのでゲタ先生なんて呼ばれてるみたい。

お話を聞いて、O先生とS先生は、ある課題について研究なさっている。S先生が話してくれたのだが、ノーベル賞まがいなしの研究である。題して「刑事コロンボ、その手の表情分析について」。S先生が身ぶりをつけて発表してくれた。四種類の基本型があってあとはその変形で、すべて演技されるのと。近頃S先生は、目つきまで悪くなったようだ。コロンボの見すぎで。(までと書いたのは、勿論、それだけでは済まされないから

である。それは、みなさんご承知で。)デモさんに、ぼくの名前を絶対ふせてもらわなくては。ちょっと、きついことを書いてしまったもんね。夜も安心してねむれぬことになる。いや明日の命の保障もない。みなさんも、あてにはならない。あなた方は、にわとりが鳴くまでに三度、ぼくを知らないと言うだろうから。

とにかく、松高の先生は、ユニークですよ。おもしろいのですよ。だから、生徒は、あきなくて済むのですな。(ああ、ねむい!)ぼくは、これからは、ひたすら、りっぱな石やきいも屋さんになるために努力していこう。御登場願いました諸先生方、ありがとうございました。

一日の大半を同胞の顔みてすごすわけですが、その同胞の中に一体何人「友人」あるいは「親友」「真友」が居るでしょう。これもある種の「疑い」です。本場の「友人」とは何なのか、何が基準で「友人」と「親友」なのか……生涯の友を持つといわれる高校時代の要のよるに思えます。

友 だ ち

友だちって何だろう。

今までそんなこと考えたこともなかった。

「友だち」平然と何の気なしに使っていた言葉だが、こうしてあらためて考えてみると一体それが何であるのか、どう言葉で説明してよいものか全くわからない。生まれてこの方十七年間。私のまわりには多くの人が現われそして去っていった。——ちょっと大げさかな。でも事実である。——そして、その多くの人を私は友だちと呼んだ。というより、自然と友だちであると思ってきた。でも今考えると、それが友だちと呼んでしかるべきだったのか。——だんだん私の乏しい頭では考えるのが困難な所まで来てしまったようだ。——しかしそれは、私だけのことではないと思う。だれもがその長くそして短かい一生のうちで、数えることがおおよそ困難と思われるほどの友だちに出会い、別れていくのだと思う。では、その友だちたるや一体何であるのだろうか。

その実体は？

それを説明するのはたいへんむずかしい。学校生活の中で、五十分間という精根を費やされる時間と時間との間、つかのまではあるが貴重な十分間には、どのクラスにおいてもある時はしみりと、ある時は我を忘れてそれぞれの話に花を咲かせていることである。だが、彼らのすべてが友だち同士だとうとういえる。仲良くおしゃべりをしていくから？ とところで私は旅が好きだ。長期の休みになると決まって一人汽車に乗る。私のまわりには知っている人など一人もいない。でも私は初めて会った人々とけっこう楽しく話をする。これからの旅のこと。学校・職業のこと、など。——いつもがそうであるとは限らないが——このように仲良きように話をしたり何か共に行動していたとて、いちがいに友だちだとは決められないのではないだろうか。まあ、これはあまりにも掘り下げた例ではあるが……。

某国語辞典には、
友だち 学校や志や行動をいっしょにする人。

と書いてありますが……。

「友だち」

ある人はこう言った。

「友情は魂の結びつきである」と。
魂・魂の結びつき——この人はむずかしい事をいとも簡単に言ったものだ。

魂 心。心とは何だろう。目には見えません。当然、手と手が糸でつながっているかのように、心と心が結びついているのは見ることができません。それだけ「心の結びつき」ということは大切なものかもしれません、言いかえれば、その分だけはお互いにかかれやすいものなのではないでしょうか。

心の結びつき。それは信じるということなのでしょ。——どれもこれも無造作に使われている言葉です。人々はそれがどういふことなのかわかって使っているのだろうか。と疑いたくなるくらい。——それはともかく心の結びつき・信じ合う。私にはわかりません。それがどういふことなのか。

よく「けんかをするほど仲が良い」と言います。心の結びつきというの、このようにことなかちしょうか。外見はどうであれ、内心ではお互いをよく理解し合っている。友だちの意味もここにのかもしれないね。

「友だち」

私たちはこれまで歩んで来た道のりで、はたして本当の友だちを見出し得たのでしょうか。一体、どれだけの人が友だちにめぐり会えた、と胸をはって言うことができるでしょうか。高校に入ったら友だちをつくりたい、とお考えになった方も多いことでしょう。また、そのような事を話しているのを、お聞きになった方も数多いことでしょう。その人々は、この高校生活の中でこの人は、と思う友にめぐり会えたのでしょうか。心から信じ合える友に……私たちはこれからの人生の中で、本当の友にめぐり合うことができるのでしょうか。どうぞお考えください。

学校の中にも建物自体にも近頃やたら文句が多い。ゴミ捨て場が整備されていないこと、ダストシュートがどうしてないのか。階段の手すりはガタガタだし、すべり止めのゴムはそこら中がはれて、踏んづけてころぶ。化学室の換気扇はどうしてこわれたままなのか。致命的ノ更衣室の欠如ノ教室で着換えをするのは、こちらもハラハラするし時間のムダノ

さて、中庭は……

中庭にて

皆さん、我が東京都立松原高校に中庭なる所があることを御存知だろうか？知っていても利用した経験を持つ人は少ないのではないだろうか。丸く植えられたさつき、色どられた菊、さりげなく置かれたベンチ。

何故利用者が少ないのだろうか。教室の窓から見たところ、ベンチに座って休み時間を過している姿は無に等しい。理由のひとつとして、場所が悪いということが挙げられるだろう。というのは南棟の一年A・B・C組、三年D・E・F組と中棟の一年D・E・F組、二年A・B・C組の間にあるのである。夏でさえひんやりとするのに冬ともなれば、立っているだけでつま先からじーんと凍ってきそうである。加えて中棟の生徒にしてみれば、両側校舎で中庭の他に見るものがなく、絶えず何らかの変化と驚きを求めて、奇々とする対象なのである。現に、友人をひきつれて、中庭に出てみたところ、奇々とした目が向けられて、いたたまれぬものである。ここへ仲

むつまじい二人連れでも姿を見せようものならヤンヤンヤの大騒ぎは当然のことになるだろう。世の中にはヒマ人が多く、退屈のぎができたときばかり、うすら笑いを浮かべて見られるに相違ない。保障の限りである。ためしにやってみるといいだろう。校内には仲むつまじい二人よりあぶれたひがみに浸っている者の方が数段多い。私が率先してやさしあげよう。まあ中庭に立つ方もヤジる方も風邪を覚悟の上でやることだ。

私が初めて中庭のできたことを聞いた時、てっきり現在のテニスコートとなっていた所にできたのだばかり思っていたのである。というのは、私達が入学した当初、未だ校庭が整備されていなかった為に対面式をそこでやったものである、当然のことながらここが中庭であると思っていたのである。別段テニス部の諸氏をコケにしようというわけではない。

どうせ中庭を作るのなら、あれだけの植え込みをととのえるのなら、池を作ろうという話があるのなら、雀と鳩の途中停車場でなく我が松高生が使用できるようにしてもらえまいか。校舎の影になり、冬ともなれば身も凍るような風がふきさぶ所に立っているわけ

中学の時のアイツはどんな生活をして
いるだろうか。

男女共学校に通うコにはわからない――

松高の諸君！特に男子生徒の諸君！
君たち女子校に興味持ったことない？
女子校に行ってみてええええなんて思っ
てる君のために、そーっと女子校の実態を教
えたげる！そんなのくだらねえやなんて思っ
てる人はどうぞ勝手に！！

じゃあ、目をギラギラさせてる君だけに教
えちゃうね。これは実際に女子校に通って
る女の子達に聞いた最新情報中の情報なんよ！
みんなこのはなしは知ってるでしょう？
不良でありながらも、純な心を持っている
太賀誠。彼をひたむきに愛する早乙女愛。さ
らに誠を好きになって自殺未遂まではかった
スケパン由紀。由紀を慕う怪物権太。愛を慕
って転校までしてきた岩清水。

そう、おなじみ「愛と誠」。でもこれら登
場人物が、みんなバラバラの学校だったらあ
れほどドラマチックな展望は望めなかったん

じゃない？

たしかに、学校中どこをながめても女の子
ばかり、たまに見かける男の姿は、ニヤけ
た音楽の先生だったり、〃恍惚の人〃寸前の
国語の先生だったり、という女子校では、「愛
と誠」ばりの青春ドラマは生まれるはずがな
いかもね。

「この世に男と女がいるのに、どうして女
ばかりの不自然な学校を作るの？」

「もう、セーラー服見ただけでゲップが出
ちゃう。」

「男の子の目がないばかりに、女の本性
まる出し。行儀はわるいし、話題といたら
エゲツない。これではオヨメのもらい手ある
かしら？」

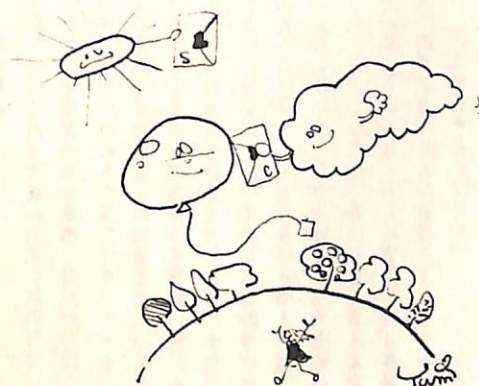
「たまに男の子の前に出ると、ドキがムネ
ムネ。なに話していいかわかんない。こんな
ことじゃBFに逃げられてしょうがないわ。」
と、まあこれが現在の女子校生の本音らしい。
どうしても、よそのお庭はよく見えるもんよ
ね。でも、女子校ってとこ特有のにおいがあ
るらしいんだ。

その第一は校則という魔物。

これは、厳しいところと、名目だけで実の
ない学校とがある。でもだいたい厳しいとこ

にはいれない。あの菊の花、まるで私達の身
がわりの様だ。

今のところ、バドミントンのよき練習場で
あるようだが、もうちょっと有効性のある向
きに使用方法を考えてみたいものだ。



ろが多く、破ると退学というところもあるら
しいよ。

その第二はスターの好き嫌いで友だちが作
られるということ。

その第三は創造性のある自由勝手な気分よ
りも、きめ細かく、きちんと物事を処理する
タイプの子が多いこと。

その第四、でも、男の子の話題は多く、特
に男の子のスターの話題が多い。

その第五、校則とは別に、仲間うちの鉄の
規則習性があるって、それが、学校中を支配し
ている。

なんともはや、おそろしいこってすなあゝ。
女子校ってところ、これで少しはのみこめた
かな？イイヤまだだっという人に、もう少し
しくわしく教えちゃおう。

前のはなしにもあったように、女子校って
とこは、あんがいエゲツないところなんだよね。
その具体例としてこんなものがある……

「ミッコノ今日何色？」

いうが早い、ミッコのスカートはパァッと
めくられる。サチエの奴め！

「よくも恥ずかしい部分を無断で見たわね。
お前こそ何色よ。」

ミッコの手は、マッハ1の速さでサチエのス

カートを……

ねえノ男子生徒諸君、こんな事態考えられる？君たちがいつも夢に見てるあの格調高い校舎の中ではこんなことが、日課のように行なわれてるんだよ。ちょっとまわり見まわしてごらんよ。いっくら我が松高で女ばなれしてるような女生徒がいたとしてもこんなにいる？男子諸君はもうちょっと、松高の女子を見直した方がよさそうね！

それから、女子高の厳しい校則についても少々……

それにしても女子校の校則には、やたらとキビしいのが多いのね。

*髪は短く。制服のエリにかぶるようになってたら切りなさい。

*段カットはダメ。パーマはもちろんダメ。

天然パーマのコは親の証明書を持ってきたさい。

*ボウリング場、喫茶店に保護者以外の人を入れることは許されません。休みの日も同じです。

*一対一の男女交際は絶対禁止します。

*小・中学校の同窓会は、男性と交際するキッカケとなり、ひいては非行の温床となります。同窓会やクラス会に出席する時は、

学校の許可を必ずとること。

*ソックスは必ず白で、くつ下の上の部分は六センチ以下。

*スポーツバッグを学校に持って来られるのは運動部員のみ。

*学園祭の日でも、他校生の入校禁止と、いったところが一般的な校則。

変わったところでは、髪型はみつ編み以外は一切禁止というところもあるらしい。

でも、どうして女子校の校則ってこんなにバカみたいにキビしいんだろノ校則ができた基本は高校生は高校生らしくということにあるらしいけど……。

まあ、とにかく女子校っていうところ、ちょっとびしわかったでしょノ

松高の男子生徒諸君ノこのへんで、GFは共学の女生徒がいいか、女子校の女生徒がいいかよく考える必要があるみたい。

今からでもおそくないよ。ほらほら、隣に



すわってる女の子が君にニッコリほえみかけているじゃない……。

甚だ無責任ですが、これらをまとめて、ある結論なり結果なりを出すのは、やめようと思います。題字だけを見ても、統一性があるとは言えませんが。しかし、これが三無主義とも六無主義ともいわれる私達の考えることなのです。これをどう感じどう反応するかは、私達の知らぬことです。はつきりした問題も提起もできぬままに甚だ無責任ですが生徒個々に残りをたくそうと思っています。

断言できるのは、〃高校生活は画一されたものではない、自分で作るものである〃ということです。

特集スタッフ一同

行 事 ル ポ

体育祭のはなし

天候にも恵まれて、カラッとしたいい天気
五月二十六日・日曜日、我が松高では恒例



の体育祭がありました。「鉄腕アトム」・「小さな恋の物語」などブラスバンド部のすばらしい演奏に乗っての入場行進、揃いのユニフォームを身にまとった美しく勇ましい各応援団もくり出し、生徒の皆さんも楽しく騒いでよい一日を過ごした様でした。では、その日の様子などをインタビューした結果をお知らせしましょう。

○競技が始まり間もなく、ある先生の意見

「今日、体育祭を見てどう思いますか？」

「毎年同じ様な事をやっていて少々マンネリズム化してきているんじゃないかな。特に応援団なんか。」

「体育祭の意義とは何だと思えますか？」

「先生にとってかい？それとも生徒にとってかい？」

「その二つ、どう違うのでしょうか。」

「そうだナ、先生にとってはね、いつも生徒を勉強でいじめてる、かわいそうだから、一年に一度くらい……。一種の変化を持たしてやる、ま、そんなところかな。」

「生徒にとっては？」

「お祭騒ぎをして喜んでいる。」

「お祭騒ぎ？じゃあ生徒達はやる気を持ってやっているとは思わないんですか。」

「思わないね、うん、全然思わない。応援団など一部の人はよくやっているんだけど……。見学の生徒がね……。」

「そうですか。ありがとうございます。」

……最初からずい分手きびしい意見を聞かされてしまいました。でも、言われてみると確かにそんな感じがしないでもない様子です。

現に応援、各係の人達は一生懸命やっているのに他の生徒達は真面目に見るところか全然関係の無いお喋りをしているんですから……。

○ややあって先程の先生

「各委員会がようやく波に乗って来た。進行もまあまあだし、盛り上ってきたみたいだよ。」――

と付け加えて下さいました。

○今度は松高生にインタビュー

白組二年女子、午後の応援合戦の最中

「あの……ル・クルールの取材なんですけど、体育祭の意義について一言。」

「ヤバイのが回って来ちゃったなァ。えーとそうね、一種のお祭り騒ぎの様なもの

ではないかしら？」

「応援合戦見ていてどうですか？生徒達、ヤル気あるんでしょうか？それから、去年と比べてどうですか？それから、それらの事について一言。」

「青組の竜がとても印象的／＼皆結構、楽しくやっていたいい、ヤル気はある。去年よりは少しよくなったみたい。」

「ありがとうございます。」

華やかな応援合戦が続きます。男子の勇ましいかけ声、女子のダンスなど、見ているだけでも楽しくなってきました。その様な中で応援合戦についてのさまざまな意見は……。

○先生

「だからと長すぎる。マン・ネリズムだね。」

というのあり、

「応援はよい。マンネリズムではないと思う。それに体育祭の応援のやり方というのはそう幾つもあるわけではないのだから、少々他の年に似てきても仕方ないんじゃないかな。今年は今年なりの良さがある、だからそれでいいのだ、そうなの

だ。」

というのあり、意見さまざま。

○父兄

「赤組応援合戦の時、フォー・ダンスをしてたね。女の子達が『先生も御一緒にどうぞ』って言ってるのに先生達はなかなか輪の中に入ろうとはしなかった。これが中学なら先生方は我も我もと一斉に飛び出すんだけど……。高校の先生、折角生徒達が一生懸命やろうとしているのだからもっと生徒に協力してやって下さい。ちょっぴり寂しい感じがします。」

と先生方にも批評があった様です。でも着せ替え競争に参加された先生などは結構がんばった様子で、

「たまにはいいや。」

と喜んでおられました。

○松高生

「応援がつまらない。それに人数が多すぎる。他の生徒の態度も悪い。」

「女子の団体競技、なまにアレ？玉入れなんてまるで幼稚園みたい。もっと考えて欲しい。それに……、予選会に落ちた人

は暇すぎてつまらない。だからもっと団体競技を多くしたい。」

「そうそう、それから三人四脚廃止した方がいい。男子と女子、もっとも喜んでやってくる風には見えないんだもの。」

「応援の仕方に工夫を／＼声がかすれて、何だか可哀そう。」

「全体的に去年の方がずっといい。」

等でした。

他にも、水をまいて欲しいという希望が強く出ました。確かにひどい土ぼこりだった。昼頃、校庭に発生した龍巻／＼すごかったですから――。

○最後に一言私的意見

皆、何だか少し消極的だった様な気がします。けれど、とても楽しい一日でした。係の人達もよくやってくれました。大変御苦労様でした。

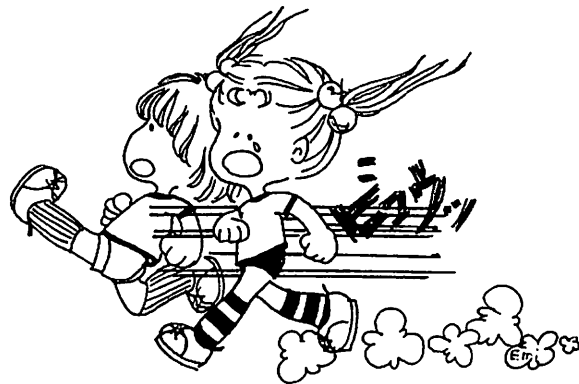
体育祭取材

月光飯メンキ。

体育祭に寄せて

体育祭への驚きは、五月の予定表を見た時に始まる。学年練習・予選会・全体練習・諸準備等ずらりと並んだ予定の群れ。殆ど一週間というものの、体育祭一色に塗りつぶされる感じだ。これは大がかりなものになるらしいと私は期待したものだ。

五月二十六日、美しい五月晴れの空のもと、入場行進がくり広げられる。勉強のしすぎか青春の憂鬱か、やや猫背のめだつ三年生は、それでも歩の運びに迫力がある。列が乱れがちで落ち着かないのが二年生。最後にチョコチョコした歩き方でそれでも生真面目に胸を張っている一年生。なかには右手右足が一緒に出てしまう生徒もあり、その緊張ぶりがはえましい。もっとも堂々としているのは応援団であろう。工夫をこらした女子リーダーのユニホームが素敵だ。殊に白組のユニホームは、昔々の幼稚園のエプロンを思わせていかにも可愛らしい。開会式では松高体操が良かった。生徒と職員がグラウンド一杯に広がって、かけ声もよく呼吸があって、松高独自の体操をするなどなかなか良いものだ。



競技が始まり審判や記録等の係が動き出すと、グラウンドに若々しい活気が満ちてくるのだが、予選会が済んでしまっているせいから、今一つ盛り上がりがない。出場選手と応援す

られて大いに楽しませてくれた。大きなマスコットをたてた白組、すばらしい竜をあやつった青組、ブルース・リー登場の赤組。しかし、後半はどうにも冗漫。男子リーダーの服装も誰かが良いすぎ、鉢巻に学生服では、新鮮味が欠く。もっと現代の若者らしい軽快さと美しさを望みたいものだ。ところで、肝腎の応援生徒はどこにいたのだろうか。リーダーだけが目立って、気の毒な程だった。

終日を変な土煙りの中で過した体育祭。スプリングクラーも欲しいがそれ以上に望まれたのは、生徒の自主独立の精神。体育委員の指導のもとに団体行動が整然と行なわれる場面と、みんながうち解けて大いにはしゃぐ場面と両方あっていい。が中途半端はただつまらないだけだ。今年もなかなか楽しかったが、委員やリーダーを盛り立てて体育祭を一本筋の通ったものにする力が、生徒の中から湧きおこってくることを来年に望みたいと思う。

国語科 水谷 文子



文化祭あとばなし

とってもみんなの目が輝いていました。あ
りふれた青春ドラマの主役の先生のような人
が云うセリフみたいですが、実際、いやない
やな——「訓話」を聞いたたり、昨日の思い出
にふけている様な目とは、少なくとも違っ
ていたのです。

小さく、内輪で、そしてあどけななしい体
育館（我が松高体育館をけなしたくないの
ですが）の光がよく漏れる、その光が見せる
あの風邪をひいてしまうようなほこりにまみ
れてこんなところでやられてられるかノとい
たくなるような文化祭（芸能祭）でしたけれ

ど、それでも、あの一年生がとぎれとぎれで、
チームワークもばっちりいらないで、心ない
生徒さんやお客さんにいびられて、——なん
とかがんばって自分の力でやってみよう、み
んなが力を合わせようとした。ぼくらは、彼
等彼女等の目が忘れられませんか。とっても
なくても衣装がカッコよくて、本当にもちた
ないくらいで、ちょっとのまちがいが許され
ないように、一人残らず、四十余名が一丸と
なって——「おい／次がおまえ出で、あのセ
リフを云うんだぞ、わかっているな。さあ、行
け／おちつけよー」などと、マイクに入らな
いように、うすいコピー用紙みたいな声を出
していた時そうしていた時の目は、やっぱり
輝いていたのです。熱いの、ほんとうに熱
いの、に照明係をやってくれて、暗いところ



自分達の劇を完璧にしようとか本に細かく
書いて、ときどきまちがえて背のところに隣
りの赤にしてしまつて、向うの側のライトの
育を見て直してあわてていたあの目も輝いて
いました。——そして、あのギンギンのロッ
ク、フューク。本当に気持よきように、ぼく
らまで気持よくされてしまいましたね。そし
てこれが俺たちの生きがいだノと云わんばか
りになんばっていました。初めての一年生だ
ってそれから、はっぴ着てハッピーになつて
いた彼らも、そして高校生活最後の三年生だ
って、みんなそれこそぎんぎんぎんでしたね。
時間が少ない、時間が少ないとボヤかれてい
ましたが、手もふるわず、足もかたつかせ
ず、ドラムスはスティックを落したり、PA
の方がうまくいかなかったり、ギターを投げ
つけて、リードさんに危うくあたりそうにな
って驚いちゃったり、みんなみんなほんとう
に元氣そうに目をきらきらさせていました。
暗くて見えなかったけど、恐らくお客さんた
ちだって、リズムの曲であれば、カッコ
イイクつで、カーベットの歌かれた床に、タ
ンタンタンとリズムを合わせたにちがいない
ません。

文化祭とはこういうものではないのですか

？確かにです。内輪でワイワイ・ガヤガヤ、
先生方の気に入らないことばかりやったり、
一分でも一秒でも遅れないようにやらされて
一部はスムーズに行われるための時間の切り
つめ役にされちゃたり。そして、来る人た
ちはおとなりの中学校の運動会を見に来たつ
いでに、たまたま我が校の文化祭とやらをや
っていたのを見たという人たちかも知れない
けど、ほんとうにちょっぴりでも、クラスや
クラブや数々の有志で、何かをやろう、何か
を成功させようとする姿、ほんとうにほとん
とに（何べんも云うようですが）熱いのが
んばっていたスポット屋さんたちの汗や熱さ
も、そして「正義の味方」も「Rachel」も
「Icecreamcakes」も「Excels
ptions」もその他たくさんの方々の有志たちも
とってもとっても美しかったのです。やって
いることが美しいのです。それで、それで僕
はいいと思います。ある程度の立場というも
のを考えて、みんなのやりたいことをみんな
のやりたいように、みんなの力で、みんな
やってみるのです。まとまることです。一
だけ、きつと高校生三無主義のひとつだっ
ています。その人たちはきつとつまらないで
しょうと思います。ーやっぱりクラスで、み



んなまとまってやりましょう、という機会に、
そこからはずれるのは、ばかだと思ひます。
問題外ですね。

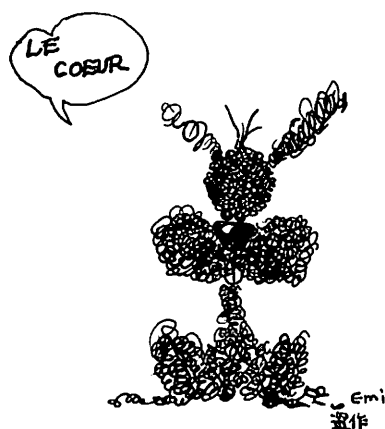
要するに、です。もっともっと燃えること
ですよ。——我々高校生は——

文化祭はとってもとってもよかったと思ひ
ます。若さにあふれていなかったまでも、若
さで一杯でした。批判はもう云う必要はあり
ません。——その文化祭に限らずして、これ
からも、もっともっと燃えるのです。我々高
校生は。とにかくです。長嶋選手みたいに燃
えよう。勉強だっていいし、エレキギター——

本に狂ってもいいし、何とか大会だっていい
し、男の子は女の子、女の子は男の子だつて
いいしね。何でもいいではないのですか。そ
んな時、やっぱり目が輝いていると思ひます
よ。

PS・やっぱりこんどは、私たちが燃えら
れる（へんな日本語？）ような環境
をつくるのが、先生方ではないの
でしょうか。

十一月三日 文化の日
文化祭執行委員会 野口 深人





溜息の春に

高校に入って何と今年の春で三年になってしまふ。「光陰矢の如し」とはまさにこのことだ。いや感心している場合ではない。一体私はこの二年もの間何をしていたのだろう。年輪は年とともに増しその年がどういう年であれに残る。しかし足跡は残そうと思えば、しっかりと足を踏みしめる必要がある。はっとふり返ると絶えず波打ぎわを歩いて

いるので、一体それまで何をしてきたのかわからない。溜息の春である。そして溜息をする度に、苦勞して頭につめこんだものがポツと出ていくような、イヤな気分がする。イヤな気分がするのだが、やはり溜息が出てくる。

高校一年、初めての高校生活というさきやかなあこがれとそのあこがれの崩壊の中で過した時期だった。あこがれの崩壊。何かある、自分を満たせてくれる何かがあるに違いないと信じていた高校という社会への失望。そして高校といっても何ら中学の時と変わらない自分への失望なのである。これといった不満があるわけではない、どこことなくやりきれない気分が漂っているのである。言っても仕方ないというあきらめが頭をもちあげてくる。

そうして二年になった。絶えず「今年こそは」という思いにせつつかれて一体何が「今年こそ」なのか、目標を見失ってしまった。それでもまだ二年になったばかりの頃は意気さかんで脳天気なものであった。しかし、一年という時間の重さがどんなものかは見当もつかなかった。もしあの頃にル・クルールが出来ていたらどんなにかバラエティーに富んだも

のになっていただろう。一年同じことをしていくのは大変なことだ。次第に編集委員の数も減り残り十名足らず。出てこない連中は一体何をしてるんだらうか。どこの委員会もこんなのだらうか。果してこれで委員会活動といえるのだろうか。化学室の片隅で生徒会誌とは何をすればいいのだろうか、と考えた時にはかつての意気はうせていた。

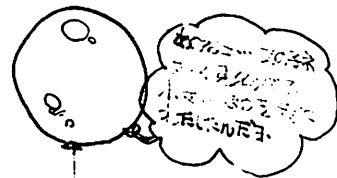
しかし今年の委員会活動には目を見張るものがあつた。文化・新聞と存在さえ疑われていたような委員会が、めざましく活動した。総務も同じである。ここではっきりと感じるのは生徒に参加姿勢が見られないこと、はっきりあらわれているのは役員選挙だろう。総会といえは単行本片手（あるいは両手）のいす運び。一般生徒の無関心さに変化はない。こういうことこそ、当委員会が飛びついて取り組まねばならない問題なのだが、編集者にとっても甚だ興味なく（やはり隣の人と同じで）数回の話し合いの後、没。では先生ならばどうだろう。先生に対しての批判・要望では。——同じく没。二者間で相手を批判するならば、自分もまた批判され更にその批判に対処することができなければならぬ。先生に文句言ったら言い放し、あとながない。加え

てこれというような要望もあがらなかった。

私は高校に何をしに來ているのだろう。一勉強一と答えることができれば最高だが、私にとってもより勉強は身に合わないが、近頃は授業のすべてが試験に引っぱられていそうで「勉強」というには私はあまりにそこから遠のいている。現実回避型。正面からぶつかっていくことができない、する勇気がない。このことが今一番身にしみている。勇気、というこのことについてである。私のまわりは勿論私を含めて、いつも隣を見る。（試験は別）

というより気にしている。異端者であつてはならないということに支配されている。表面でいくら異端を装っても中身は同じだ。正面きつて何でも言える人はいい、言いたい、言っしまおう、と考えている間に機をのがして、内にこもる。そうすると俗に言う「陰険」となる。そう言われてまわりをながめて見れば、こんなタイプは女子に多い。そう、何といつても女性にデリケートなのだ。

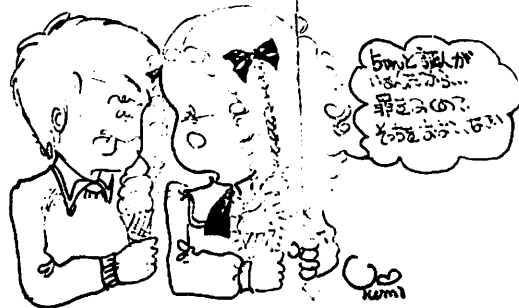
生徒会誌が生徒会誌として存続するにはどうしたらいいのだろうか。実際はル・クルールという生徒会誌というよりも有志（物好き）発行のパンフと受けとめられていそうだ。そうではない、委員会に出て来ようが来まいが、



各組に一名以上、多いところは五人も六人も委員がいるのである。毎年毎年、考えられている問題なのだ。

この号は単刀直入に言う編集過程でミスが多すぎた。赤字も出してしまった。繰り返してまで発行する意義があるか。繰り返して考えて結論が出ぬうちに春になってしまった。溜息。しかし、文字にはならない途中の話し合いのことを考えればそれなりに価値があると思う、より信じている。文字になったものより、文字にするまでの価値が大きいものだから、もっとたくさんの人に考えてもらいたかったと思う。

来号もまた同じような経過でできていくだろう。しかし今年踏んだ無駄足もまたやって



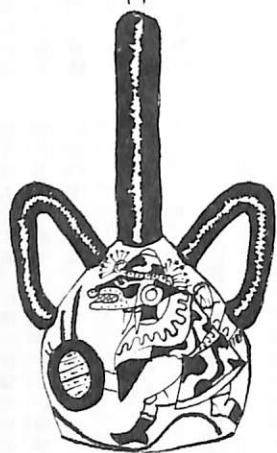
みるといい。ひょっこり何かが出て来るかも知れない。

春になった。溜息。というより、昼寝の春のようだ。いや昼寝などしてはいられない。今年で高校生活も終りになるはずだから

生徒会誌編集委員会

万木あき子

生徒会報告



これからの生徒会

権田 敦

高校という所は、やたら個性が強いのが特徴の一つです。生徒会活動の状況やら、進学率やらで、その学校独自の雰囲気を持っているし、雑多というかとにかくいろんなタイプの学校があるものです。

しかるに今の松原を考えてみると、いくぶん個性に欠けているのではないのでしょうか？つまり学校を人たにたえるならば、松高は個性に欠ける人、平凡すぎて視野の狭い性格の持主といえます。これは生徒が規則を守っているかとか、生徒会への関心が持たれているかといった事によるところもあるけれど、やはり生徒の積極的な活動に今少しといった今の状況が最大の原因といえるでしょう。

このような活動性に乏しい現在の状況では、「これからの生徒会」を考えた時に、将来、生徒の自主性による積極的な生徒会をめざすというのは、難問であります。そもそも今までの松原には、わりと自由な空気が流れていて、その悪い方向が生徒会の低調ぶりとなっ

ています。生徒の皆誰もが松原に入学して、感じたと思いますけど、校内生活がきわめてF.R.E.Eで、のんびりぬくぬくといった態度が印象に残ります。それらは又、我々の先輩達が残してくれた土産物でもあります。

ですから、これからの生徒会を構成する皆さんに望みたいのは、一言でいえば「自主性」です。三年間（もしくは四年間）という人生最高の青春時代に、ただ何もせずに規則だけを押しつけられるのでは寂しいのであって、主張したい事、実施したい事などをどしどしとだして、常に生徒会機関をにぎわすような方向へ全校生徒の目を向ければ、なかなか味のある生徒会となって自ら学校としてのまとまりがつくことも予想できることです。例えば同好会をつくろうとか、自由な会合を開きたい等の意見が出されれば、サークル活動によって生徒会の活動がさかんになるわけですから。

又、現在の松原の長所として、行事への参加姿勢が熱心であるというのがあげられます。体育祭や文化祭などは委員会の努力もさることながら、みんなの母校意識がそこに結集していたのも成功の原因なのです。

「これからの生徒会」……

まだまだ問題は数多いのですが、我々は、我々のあとに続く松原の後輩のために、生徒の自主性に基づいた、よりよい環境を導いていかねばならないのです。

前期生徒会役員を終えて

前期生徒会書記 菅谷 恵子

まず、私が総務役員になろうと決意するまでの過程など説明しようと思います。

あれは、補欠選挙の公示がしてあった六月のある日のことでした。予算作成に熱心には？取り組んでいた前期生徒会役員計六名は、とうとう人手が足りないというので、総務役員である常任委員会の委員長に集合をかけたのです。ところが、いくら放送などと呼びかけてみても生徒会に関心が無いというのか、我が身で手一杯というのか怠慢というのか、集ってきたのはちらり、ほらりという状態で。そこへ生活委員会から当時副委員長であった私がいったのが運のツキ。恐しいほど生徒会室が汚いこと。生徒会室で一番初めにしたことというのは、印刷インクで手を黒くしながらの掃除でした。

それはさておき、次に驚いたのは、少ない予算と予算の約三倍の請求との板ばさみになって、ゴミくずやホコリの中で一生懸命に良案を練ろうとしている役員諸氏の姿でした。それを見て、少々の雑用を手伝った私は、始めは生徒会の役員などは奇特な誰かさんが適当にやってくれるものだと思っていたのに、段々と関心が高まり役員の中に悪友がいたのが再び運のツキ。いつのまにか、立会演説の壇上に立っていたのです。

接触してみても、これらのことが一人前に言えるのですが、この私ですらほんのささやかなほんのちょっとしたことで、生徒会に接する機会を持ち、関心を持つことができたのです。生徒会を運営していくのは、やはり生徒ひとりひとりなのです。皆さんの協力によるものなのです。ほんのちょっとも、生徒会というものを理解して、使命に目ざめて欲しいと思うのです。生徒会あつての生徒、松高ではなく、生徒あつての生徒会・松原高等学校にしようではありませんか。

いざゆかん、松高生よ！

自治による委員会活動

多くの委員会について詳しく知っているわけではないのですけれども、ひとつ松高生徒として委員会の活動、その他についてを感じておきたい、このように思うのであります。

前期は生活委員、後期は生徒会総務とめまぐるしく、いろいろな仕事におわれてきて今日に至っているせいか学校全体がそんなにも怠慢であるとは感じられなかったが、先日の

選挙の頃からだんだんと松高にも怠慢という高校の病気がはびこっているのだと感じざるを得なかった。

ここでのように言おうとも、一挙に全生徒がファイトを出して学業にクラブにと全力をぶつけ、学生生活を謳歌していくとは言い難いが、しかし少しでも体育祭や文化祭、そして生徒会選挙に自分自身で参加し、何かを作り出す喜びを感じとれる人が多くなるような学校の雰囲気が必要だと思う。

今の僕達一年生が経験した文化祭、体育祭は僕の見るかぎり色々の問題点を含んではいるが一応成功と見ていいと思う。体育祭・文化祭のみに焦点が集まってしまったようだが、この体育祭・文化祭くらいしか他のクラス、他の学年と接触する機会がないのではないだろうか。より多くの人がより多くの人と接触し、考え、話し合う事がなければ松原高校をより深く知る事はできないと思う。

なんだかとりとめの話になってしまっただが、今回成功した文化祭、体育祭が来年も又再来年も成功するとは限らない。来年もあのすさまじい応援合戦が見られるであろうか。あのダチョウのけんかにも似た騎馬戦がより爽快にできるであろうか。又、あの三年

生のみごとな三銃士のような名演技を見る事ができるであろうか。又、あの夜のフョークダンスがより楽しく行なえるであろうか。僕はやりたいと思う。

しかし、各クラス中でその時になって先導してくれる人がはたして何人いるであろうか。ちょっと考えて見てほしい。「あれ／＼考えてみたらこのクラスにはそれらしきやつが少なえなあ、だめだこりゃ。」と思いきこすであらう。その時である。その時こそ、目覚める時である。「よし／＼おれがやってやろうじゃねえか／＼おれが去年より、りっぱな行事にしてやろうじゃねえか／＼おれが三銃士よりすばらしい演技を見せてやろうじゃないか／＼」と決意した時からその人の高校生活が灰色からバラ色へ急転する事はまちがいないと思う。ここでやっと委員会について述べることにしましょう。一大決心したらその日から学校生活に張り合いができ、全てをやりぬける闘志が身体全体にみなぎり受験勉強なんかへのカッパ国立一期スーラストラと合格。これほどうまくはいかないと思いますが、学校生活、高校生活が何なのかという答えぐらいいは体得できるのではないのでしょうか。その為にまず何をすべきか？それはまず日々の活動である

委員会を各自の手で充実させていく事だと思ふその一人一人の手が生徒自治の活動そのもののなのです。生徒会総務が所信を行なっているのが生徒自治の姿でもなければ、生徒総会が生徒自治の姿でもないのです。生徒自治の姿とは日々の委員会の活動、クラブ、HR、全てが生徒自治の姿なのです。

では、みなさんは、自分自身生徒自治の活動に加わっているでしょうか。委員会は毎週出席していますか？ええ、していない。そうでしょう。

自治というのは読んで字のごとく、自分で治める」という意味です。それまでできていないのならば環境に単に左右された動物と同じです。いつも受け身で何か助けがないと自分で活動しない姿です。これが俗にいう怠慢であると思う。

さあ、みなさん自治の目を開けましょう。そして「いっしょ、やってやろうじゃないか／＼」と委員会活動を活発にしていきましょう、自分の手で。さようなら。

生徒会会計 国光 慶太

生活委員会

みなさんは、現在、わが生活委員会がどのような活動をしているか、その活動状況を、知っていますか。おそらく、ほとんどの方が知らないのではないかと、思います。

そこで、それをわかっていただくために、前期の活動内容を、報告したいと思います。

まずその前に、委員会活動を、より円滑に進めるために行なった、二つのことを、お知らせしておきたいと、思います。一つは、「生活委員会」という名称ですが、このたび、Z「C」と、改名し、よりいっそう、親しみやすくいたしました。もう一つは、腕章を作り、一般生徒と生活委員の分離を、はかったことです。この腕章ですが、これは、すべて自分たちの手によって作った、非常に、価値のある、貴重なものです。

さて、肝心な、活動内容についてですが、前期は、いろいろとそがしく、体育祭あるいは文化祭において、男子は警備（校舎内外の巡回）、また女子は受付（これは説明するまでもないでしょう）を、行なってきました。また生徒総会においても、われわれは、一役

す。

とにかく、最後にひとこと、みなさん、生活委員に協力を。

整美委員会

また、それらの仕事のあい間をぬって、話し合いをかさねてきたのが、当面の大問題である、外出問題です。これは、だいぶ以前から問題となっていることなのですが、いつも次期にもちこされるのです。われわれは、外出の全面禁止という線を、打ち出しました。そして、その執行に関する、種々の問題を、検討の最中に、前と同様に、時間切れでストップ、となったのです。つまり、具体的な解決策が出ぬまま、前期終了をむかえたわけです。しかし、去年の後期から見ると、全面禁止という方向に、向かっただけでも、進歩したのではないかと思っています。

以上が、前期の活動内容です。

そこで後期ですが、この問題を、委員会活動の目標にすえ、このこと一つに、全勢力をそそいでいただきたい。特に後期は、これといった、学校行事もなく、この問題をかたづけるのには、絶好の時期ではないかと思ひ、後期の委員会に、大いに、期待しているので

整美委員会一すなわち掃除委員と、諸君の中には連想する人が多い事と思う。事実、掃除用具の配付、花壇作りなど、華やかさはないかもしれない。しかし、この社会にあつて、すべての人々が表面に立つ事だけを求めたらどういう事になるであろう。すべての人間がいわゆるスターと言われる階級に憧れ、それをのみ望むならば、この人間社会は生存し得ないのではないか？民衆がいるから政治が成り立つ。病める人がいるから医師が必要になる。無知な人がいるから教師が要される。こう考えてくると整美委員の大切さがわかってくる事と思う。学校があつて大勢の生徒がいる。必然的に整理整頓が要される。大げさに言えば、僕たち整美委員のお陰で諸君は気持ち良く勉強出来るのであると自画自讃しているのである。

前期活動内容は体育祭・文化祭における準備やその後の清掃、又、化学室前の花壇作り

などなど諸君の目につかない所で活動している、いわば縁の下の力持の存在であるといえる。しかし反省する事も多々あつた。これは委員長としての僕の責任かも知れないが、すべての委員が一致団結して事にあたつたとは言ひきれない。委員にはなつたものの馬鹿々々しい、時間がないなどの理由付けをして自らの権利を放棄してしまい、全く顔を出さない委員のいた事も事実である。後期委員活動に際して要望したい事は、自薦他薦によらず、委員となつたからには、責任を持つて事にあたるという事である。前述したように整美委員活動は地味で目立たないが、我々にとつてなくてはならない委員会であると思う。僕は誇りを持って整美委員として活動してきた。今後、整美委員となる諸君も胸を張つて活動して欲しいと思う。

だが、学校環境の美化について整美委員に一任されても困るのである。一人一人が自分の学校であることを認識して、勉強しやすい場にしようという意識を持つてもらいたいのである。

保健委員会

命——。あづかつてます。

保健委員会——というと、なんかこう地味で目立たないようだけど、実はみんなに信頼されなければならぬというなりっぱな委員会なのです。たとえば、ある人がころんで足をすりむいた。そしてそれがたとえバンドエイド一枚のキズでも、保健委員はその人の一命を守って、すかさず保健室に連れていくのです。たとえそれがどんな人でも、笑顔をもって、やさしくやさしく介抱してあげるのです。一年に一回の健康診断の時も、保健委員会中心にやっています。秘密は守っています。

そして、その健康診断の終わった後——
とっても楽しいことがあなたをまわりますよ。

(おかし有り、お茶有り)

ナイチンゲールのようにやさしく。

山口百恵のように愛らしく。

西城秀樹のように力強く。

そんな委員会なんです。保健委員会って。

あつ、それから最後に。

保健室は先生が確保している食物でいっぱ

いなのですヨ——ムフフ。

図書委員会



図書委員会。その仕事は勿論図書室内の雑務。二週間に一回のカウンター当番。図書新聞の発行。読書会開催。年一回の蔵書点検。そして文化祭への参加。この五つが主だった仕事の委員会です。その他雑務は数知れず。みなさんはここまで読んできて、「こんな委員会に入ってしまったら。」なんて思いましたか？でも、図書委員会くらい委員の留任の多い委員会はないんですよ。四九年度後期はなんと七十%にもものぼりました。その魅力はどこにあるのでしょうか。それは、その雰囲気にあるそうです。先後輩の隔てのない和

気あいあいムードです。真剣であるべき委員会の途中に冗談や笑い声の出ることはあまり感心できませんが、ただ壁に向かって話しているような他の委員会（「放送委員会は抜いて。」との声あり）よりは、意見が出やすかったようです。四九年度文化祭もそんなムードから全員の協力が得られ、好評を博することができました。とってもいいムードですね。その上委員には、司書室、研究室に自由に入れる特権があります。一人ひっそり勉強したい時なんか、研究室の静けさの中で、なんていい気持ちです。これは、改めねばならないのですが、今、図書室で一番騒がしい所、なんとカウンターの所です。でもそれも決してただ悪い面ばかりでなく、そこそ委員の溜り場、和気あいあいムードの出所なのです。でも、もう少し静かにならないかな。他の生徒への示しがつかないでしょう。そしてもう一つ、時として突然委員会による遠足なども催されるのであります。委員の親睦を深めるには、とてもよい傾向であると思われまふ。そして、これこそ最大の特典？先生の話によると、過去のデーターから図書委員会出身者は、大学進学率が高いそうです。でも、あまりさだかではありませんよ。

とにかく、そんな松高随一の楽しい委員会あなたも入ってみませんか。

文化祭執行

男の子は数えるほどしかいません。……数人です。女の子の人数はその三倍近くなのです。我ら松原高校の中で女性上位の委員会として有名？なのであります。顧問の先生方は、三橋達也こと橋本雄司先生はか数名です。

今は、野球でいえばシーズンオフ。（こんなことがあつてはいけないのだ！／＼）ところが夏休みを過ぎると季節労働者みたいに、いそがしくなります。今ごろは、八週間に一回ぐらしか事実上やらないのですが、この時期になると一週間に八回ぐらい委員会をやるのです（うそ）。

選挙管理委員会

我々選挙管理委員会の仕事というのは、皆さんは中学時代を通して知っていると思います。生徒会役員を選挙し、それを管理していくという仕事です。こう言う簡単な仕事のように聞こえますが、学校における生徒だ

けの組織である生徒会を創造させていく重要な仕事なのです。

この学校における選挙で一番苦労する点は立候補者が少数しか出ないということです。

何とか生徒会を成り立たせていかなければなりません。以上のような現状を知ると共に、我々が松原高校の選挙管理委員会を認識してもらいたいと思います。

文化委員会

文化委員会の紹介と言っても、文化委員会は、去年まで文化祭執行と合同で文化祭のことしかやっていたいなかったので、紹介するのは本年度（四十九年）の活動だけです。

僕達が、始めて独自の活動を、行ったのは、九月二十八・二十九日の文化祭の時の十六ミリフィルム、「リボンの騎士」と、「ふたりのロッテ」の上映でした。この一つの映画、特に、「リボンの騎士」は、本校生よりも、一般の子どもたちにもうけたようでした。

始めて行った映画会としては、一応成功したと思います。

文化委員会の仕事というのは、まだパターン化していないので、いろいろなこと、たと

えば映画会、レコード鑑賞会、i.c.c.などが考えられるので、かなり他の委員会とは、異なった、生徒を楽しませるものになると思います。

これからも、映画会などを行う予定なのでその時は、どうぞ……。

体育委員会

高校生活を体育委員に賭けてみては？なんて、ちょっと大げさかな？でも、松高の運動をさかんにしている一つとして、この組織があるのですよ。縁の下の力持ちとして、体育関係の全てとつながりを持って、男女36名が協力し合い、皆が運動により親しみを持てるよう、又、個人の持つ力を伸ばすように努めています。

年に一度の体育祭、春と冬の球技大会などが体育委員にとって最もやりがいのある仕事です。その中でも主な行事は、年に一度の体育祭です。この頃になると、三ヶ月程前から計画を立て、委員全員が努力して準備をしたり、より良い体育祭が行なえるように趣向をこらしたりして頑張っています。当日には委員長をはじめとし、進行、準備、審判などそれ

その仕事が割り当てられ、一人一人が責任を持ってやりますから終った後のあの「ホッ！」とした気分、何とも言えないのであります。

汗と泥にまみれながら、限らない可能性に挑戦していく——これが体育委員会の望む姿なのです。

放送委員会

「エム・ビー・エス、えむ・びい・えす・こちらは『まっばら・ぶろうどきやすていんぐ・しすてむ』です。ただいま、まいくろはおんのですとちゅうです。」

M・B・Sのアナウンサーは、声だけでなく顔もよく、ミキサーはハンサムぞろいなのです。私達の仕事の場、『放送室』はいつもそうじがゆきとき、性能の良い機械がいっぱいつまっています——なんて、冗談はさておいて、とにかく、M・B・Sの仲間（そう、まったく仲間同志のつきあいなんです）は、容姿は問題外として、いい人ばかりそろっています。そして、機械は、ときどきすねて、ミキサーを困らせるけれど、なでたり、たたいたりして、あとはなんとか技術で

カバーしてます。でも、一応、防音してあるアナウンサー室に、音のするマイク、デスクにデッキ、ほんの二、三枚（ウツダヨ）のレコード……。この放送委員会、メンバーによつて、あと百年は続きそうです。そのなです。M・B・Sは、あなたを求めている（なんか、どつかの求人広告みたい）だつて四十九年度の新アナウンサーは、わたの四人。フウフウハアアア言つて仕事をしております。

では、どんな仕事をしているかと言うと。ホラッあなた知ってるでしょう？ あれですよ。あれが我M・B・Sなのです。それから、さわやかな朝の放送に下校放送、みなさんのお役に立つ連絡放送——。あれはみんなM・B・Sの仕事なのです。では、下校放送をいってみましょう。△今日のBGMは▽「青い影」（ビビビビッ ポーン）五時になりました。校内に残っている生徒は、すぐに下校して下さい。なお、帰る時に、教室および廊下の窓をしめ、電気を消してから帰して下さい。……M・B・S

新聞委員会

「なんだこりゃ？」あのむなしさからやつと一年が過ぎました。あの時のピラも今じやりっぱな新聞です。「ときどきタイムス」第五号。少ない予算の中から五号目までを出したヨロコビ。ヨロコビ。ヨロコビ。

「ときどきでも出してこーや。」と言うことで命名されたこの新聞。三年間の眠りから目覚めたばかりの眠たい顔して、第一号はあくびしながら。第二号は目をこすりながら。三号・四号・五号。回を重ねるたびに内容は充実、かつユニークになって来ています。（まるで委員の人柄を反映しているように……）

さて六号、当然あなたが作る新聞です。あなたの考えの一つ一つが確実に反映され記事になるはず。なにしろみんなシロートなんですから。ひょっとすると編集長になれるかもしれませんよ。ホント！

新聞記者気どりでインタビューしてみたい人。自分の文章を活字にしてみたい人。へただけど一生に一度ぐらい新聞のカットを描いてみたいナァーと思う人。輪転機のハンドルを回してみたい人。それに、レタリングを

少しやっただから、題字でも書いてみようかなァー、とかすかに思う人も、是非委員になつてほしいのです。ほんとに。

博学才媛にして、性狷介にあらず。人もふりむく豊頰の美少年・美少女。なーんて。こんな新聞委員の仲間入りして、楽しい実のある高校生活を送ってほしいのです。それは……。

英語部

皆さん、英検って知っていますか？ 毎年春と秋に文部省が行なう実用英語技能検定のことなんです。筆記試験と口述試験とがあり、合格するとチャーンと資格が取れて、就職の時は勿論、海外留学の審査の時になどに有利になるのです。日頃英語に慣れ親しんでいる私達高校生にとって最も取りやすい資格とも言えるでしょう。

では、この資格を取るにはどうしたらいいのでしょうか。答は簡単。「即、英語部に入ること」なのです。英語部に入るには評定平均値三・五以上、などと固いことは言いません。英語が好きならそれでいいのです。部費も取られません。備品として、英検二級受験者向け

のカセットテープ、読本、すべてそろっています。

別に英検の資格なんかいらないう人は肩のこらない英語の笑い話を収めた *Ele mentary Stories* という本とテープがあるので、ヒヤリングの練習などに活用して下さい。

最後に、皆さんが一日も早く英語部に入つて、必ずや英検二級をとめてくれることをお祈り致しております。

合唱部

我合唱部の紹介。一番良いのは、音楽室に來てもらふことなのですが。三十一人の部員、三・二・一年ともに、ニックネームなどで呼びあつたり、三時三十分集合なのに、なぜかしら三時十分頃からみんな集まつて、ピアノを弾いて、フォークソングなどを歌っていたり。そんな楽しい仲間たちばかりなのです。だから時々思うのです。ズーッと勉強する時も、みんなといっしょにいたいナと。そんな理由からかな。合唱部内に旅行委員（レクリエーション委員）があつたりするのは。サイクリングやハイキングなどにみんな

で行くのです。OBまでも参加して。遊ぶことばかり考えているのかな。

でも練習中はホントに真面目なんですヨ。ウソみたいに。

そんな私たちにも、たった一つ悩みがあるのです。それは、男子の人数が少ないことなのです。エッ／＼男子が少ないって？ 合唱部にもまだ男子部員がいたのか、なんて言う人もいますが、合唱部にだつて男子くらいはいるんですよ。ステキなステキな方たちが。部員の四分の一くらいかな。そんな訳で、これを読んだステキな松高の男の子、入部して!!そして、みんなと一緒に歌いましょう。

すてきな歌、美しい歌を歌いこなすこと、



私達には、まだまだほど遠い話です。でもみんなと一緒に歌うことはできます。決して、みんなが良いわけでもないし、歌がずばぬけてしょうずなわけでもありません。でも、バツグンのチームワークの良さを十分にいかして、ひとつの心に向かって、毎日、練習にがんばっています。

華道部

いけばなは自然を失わないように一尚、それよりも一層、美しく、自然美を発揮するものです。なんて、最もらしいことを述べていますが、さて、現状は？といいますが、ただ、ひたすら、花とにらめっこという感じなのです。

現在、部員十六名（全員、真正正銘の女性のはずですが）が、毎週土曜日の放課後、被服室に集まって活動しています。

なにしろ一週間の終わりの土曜日、ともするとめをはずしがちなのに、花を手にしたら、みんな「この枝はどこにさそうかな」なんて考え出し、真剣そのもの。そうして先生に直して頂くのですが、自分の番が来るまで他人のを盗み見て、「あっ、あれはいい



枝だ。」なんて自分の腕はたなに上げて、人の枝をうらやんだり。とにかく忙しいのです。同じ花材なのに、さす人によって花が色々な姿になっていく。一年半もやっていながら、今でもそんなわかりきったことに感激しているのです。何か内輪の話ばかりで、紹介文になったかな？

最後に、我華道部の宣伝の為に――

――華道部に入っていると

（もちろん活動しなくては。）

家元実筆のお免状が、卒業と同時に手に入るのですよ！――

剣道部

剣道は、今若者になくはならないスポーツである。今の若者は、礼儀正しくないと常識知らずとかいわれているが、それはぜひ剣道を通して学んでほしいと思う。また、剣道を始めれば反射神経がすこぶる鋭くなり、決して不慮の事故は起こさずにすむのである。であるからして、剣道は、生命を守るスポーツでもある。剣道は、とかく古くさく、地味であると思われがちだが、こうしてみる



と現代生活に必要なものであると思う。次に松高剣道部の説明であるが、現在までの成績を書くと、東京都大会ベスト10。を筆頭に城西支部ベスト8。など数々の輝やかしい成果をおさめている。これは、都立校としては驚異的な成績である。これも剣道部には、剣道バカが大勢いて、剣道に対する情熱が並大抵のものではないという証拠だと思う。

毎日の練習は、量より質を目指して、短時間集中法をとり、また、気分を変えるために

一週間に一回は、近くの公園までランニングをして、そこで遊んだりする計画も立てている。

また、松高剣友会というOB会があり、現在七十人もの会員がいて、毎月一回、現役も交えて練習している。剣道部が、今まではらしい成績を残せたのも、この剣友会による所が大きい。部員四十名、竹刀を振り回して楽しく活動しており、高校に入学してから剣道を始めた人も、見事に二段をとり、各人いっしょうけんめいに努力している。部員全員、より多くの人が剣道の楽しさを知ってくれるように希望している。剣道をやってみようと思う人は、剣道部をちょっとのぞいてみよう。

サッカー部

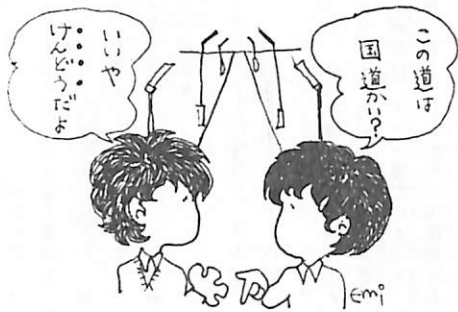
ハイ、サッカー部です。サッカー部はサッカーをするところです。

サッカー部はバカが多く、今度の部員こそはおრიこうちゃんを欲しいと思うのであるのです。むろん、バカも歓迎いたします。今の二年には「ベンジョムシ」とか「ニブノイチ」などと言う、不思議な生物がいるので、

この生物を見物したいという人は、サッカー部にどんどん入りましょう。できれば、サッカーに燃えている人が欲しいのですが、初心者でもどんどん入ってきてください。上級生が熱心に指導しますので、夏休み迄には、ベレもビッキリのうまさになることでしょう。

次に、松高サッカー部の伝統について、お話ししましょう。体育館横に並んでいるクラブの部室長屋の一番スミの部室が、サッカー部の部室になっています。校庭から見ると、横尾忠則もビッキリという、スバラシイ大イラストがあるのです。続いてドアを開けるとメカニックにまとまった部室の内部が目の前にひろがるのです。また、スバラシイ部誌、『イレブン』というのがあるのです。内容は、読みたい人はサッカー部に入りましょう。また新しい伝統となった、二年の唐木君のオーバー・ヘッド・キックを变形したトリック・シュートを習得したい人はサッカー部に入りましょう。

サッカー部ではマネージャーを募集しています。女性の皆さん。今の二年のマネージャーを見てください。あれに世話をされたのは部員の気力減退間違いなしなのです。そこで一年生のマネージャーを募集するのです。



なるべくカワイコチャンがいいのですが、物
価上昇の為強く要望はいたしません。部員に
は、カッコイイおにちゃんがいっぱいいま
すので、仕事もやりがいがあるでしょう。サ
ッカー部マネージャーになって有意義な高校
生活をおくりましょう！

山岳部

以前は、かなり多くの部員を有した、我が
松高山岳部も、なぜか最近では低調な部員
部員の減少は、クラブ運営にとって、致命
的な問題である。これからの山岳部にとっ
て、部員確保が最大の課題となる。

それでは次に、山岳部の性質について少し。
我が山岳部は、部員数こそ少ないけれど、い
や、それだからこそ非常に、家庭的な雰囲気
に、つまれていて。山岳部の活動の場は、
言うまでもなく「山」である。この山で、我
々は、先輩・後輩の分け隔てなく、共に苦し
み、共に楽しみ、互いに助け合う。夜は、美
しい星空の下、一つのテントの中で、同じ釜
の飯を食べ、行動中の苦しみも忘れて語り合
う。山において、もちろん平地でも、先輩と、
後輩の堅苦しい区別などは全くない。

にもかかわらず、今一つ活気が足りないの
があります。一時は、伝説によると、正規部員
二人その他幽霊部員という具合の時があつた
そうです。ここで物質面を充実させたので、
今度は内容面を大きくしなければ、なりませ
ん。量より質への、政策転換です。そこで諸
君。活気と元気と活発さと若き血潮にあ
ふれる諸君。(上のおせじ語群の中から二つ
選んで、自分にはめてください。)我々は、
君等のはいるのを、待っているのだよ。柔道
部は、柔道の技だけでなく精神をも育ててゆ
くことが理想です。そこでぜひとも、はいり
ましょうね。又、合宿などもやるし、これか
ら対抗試合もさかんにしてゆくつもりです。
先輩もいい先輩です。どうぞ柔道部まで、お
こしください。ええ、はいる気はなくても、
見るだけでもよかとですから、一度来て見て
ください。(体育館の一番入口に近い所でや
っております。活動日は、月水金ですよ。)
もしはいりぬれば、何かよいことないことな
いでしょう。だから来て見てください。待つ
てます。ウッスノ

二年E組五十嵐まで。

ところで、なぜ苦しい思いをしてまで、山
に登るのであろうか。この問いに対する答え
は、一つには定まらない。人それぞれである
しかし、それらは共通して、皆、きわめて単
純である。「山がそこにあるから」とか、「山
が美しいから」とか、「高山植物を見たい」
とか、「山の厳しさに勝ちたい」などなど。
我々山岳部員も、それぞれ個性的な、目的を
もって、山に登っているのである。そして、
多大の苦難の後、やっとその目的が達せられ
た時、言いようのない感激と、満足感を、味
わう。この感激の瞬間、つい先程までの苦し
みは、一気に吹きとんでしまう。この感激と
か、満足感というものが、どういうものであ
るかは、一度でも、山に登ったことのある人
なら、誰でもわかるはずである。また、この
ほかに、山で得られるものに、大きなものが
ある。それは、何事にも耐えられる強い精神
力、及び体力。「山に登る」というだけの、
事から、得る物は、本当に大きい。

では、最後に、我が山岳部の、この一年間
の全部の山行きは、書ききれないので、主な
山行きを、示しておこう。
○冬山合宿 十二月二十五日～二十九日
奥秩父 金峰山・瑞山

食物部

食物部とはイコール、クッキングクラブな
のです。活動は週に一回木曜日のみでして、
一見すると、おとなしいクラブだなあって、
思われるかもしれませんが。

でも中身はとっても明るくて楽しいクラブ
なのです。とにかくお菓子や軽食やら作り、
料理することが中心なので、お嫁さんにし
たくなっちゃうような女の子ばかりの集り
です。自分達で作りたいものを考えて、何
でも作っちゃうのです。

作り方も顧問である弓家田先生を中心にお
互い研究しあつて、それぞれマスターしよ
うとしているのです。

私達の一番大きな仕事は、毎年恒例のあの
文化祭の時の「大レストラン」なのです。

学校内のみならず、そして父兄の方々、先
生などに喜んで食べてもらえるようにメニ
ーを考えて部員一同はりきってとり組みます。
文化祭は、食物部にとって一年中で一番やり
甲斐のある行事なのです。

ところで、普段の活動で作っているものを
具体的にあげてみますと、クッキー、プリン、

○春山合宿 三月二十五日～二十九日
木曾御岳山

○新人歓迎 五月二日～五日
丹沢主脈縦走

○夏山合宿 七月二十一日～二十五日
北アルプス 朝日岳・白馬岳

○沢登り 八月二十七日～二十九日
西丹沢 小川谷廊下

以上のほかにも、数多くあるが、紙面の都
合により、これ位にしておく。尚、我々とし
ては、これからは「こわい山岳部」のイメー
ジだけは、絶対に作らないよう、先輩・後輩
が皆、友となつて、楽しく山に、登れるよう
なクラブを目指したい。

柔道部

我々柔道部は、松原高校全人口の一・五
割を占め、活動時の体育館の全面積の四分の一
を使用、保有畳数は四十枚にのぼります。し
かしこの、圧倒的物質的豊かさを誇っている

中華まんじゅう、グラタン、スパゲティなど
いろいろですが、とにかく自分達で作って、
食べるという事。面白くていいものです。

どなたでも結構です。一度食物室のドアを
開けてのぞいてみませんか？
気軽なクラブです――

書道部



はい、こんにちわ……………

なにを言いたら、いいのかわからないいう
に、書き始めました。

あまり、いいえ全く、皆さんとは御縁がな
いようで、活動していることさえ知られてい
ないようですが……………聞いて下さい!!

活動はしているのですよ、ホントニ……………
わずかのにんげんで……………でも、あなたも、
知つての通り、文化祭の時のあのすばらしさ
少々、誇張すぎました……………しかし、あれ
ほど、ユニークなものはなく、活動だつて、
いわば、文化祭のために、毎日、いや、一学
期のおわりごろから、アイデアをねるのです。

すてきでしょ／＼すばらしいでしょ／＼

……もしそう思ったら、自分で仲間を集めて、書道クラブをつくって下さい。どんなのでもけっこう。ただ、書道に関連した活動して、文化祭で成果をみせるような………やつてみよう／＼………やつて下さい。

書道なんてかつたらいなんて言わずに、われわれ、書道部の期待はあなたにかかっているのです。

一年の子／＼これを読んで、ばかばかしいと笑っているＹＯＵ／＼おねがいです。もし、ほんの少しでも、ちょつと、あつたら、ね、いつて下さい。………

松原高等学校の書道部はぜったいに、ぶつぷれてはいけません。

もしも、これでだれもきてくれなかったら、偉大な書道部は………どうなってしまうのでしょうか………

ヨロシクお願いします。お待ちしています。

生物部

一年生の諸君は、必修科目で『生物』なる科目があるはず。その生物の授業で行なう実験を事前にやつて理解しちやおうつてエわけ

それに、後でもっと深く実験すればそれだけ理解が深まる。理解が深まれば、成績が上がる。成績が上がれば、小遣いをせびることが出来る。良い事づくしののだ。ところで、君達は文化祭それも生物部となると、すぐに頭のイイ点取り虫の様な奴が入る部だと思いがちなのではないかな？しかし、それは大変な間違いなのだぞ。苦手な奴が入ってなんとかするというのが我生物部なのだ。あつ／＼得意な人も勿論大歓迎いたしますのだ。

又、毎年恒例の夏季合宿では、千倉・山田寮などの各部が行くような所ではなくて、あのあまりにも有名な花の咲き乱れる湿原に囲まれた美しい尾瀬。そして花や蝶、昆虫などが思いっきり採れる入笠山。とにかく、自然の中に溶け込んでの活動。自分達で採ってきた虫などの標本作り。すごく楽しいことだと思いませんか？エッ／＼君イ。

ソフト部

「類は友を呼ぶ」とか申します。

そんな言葉がびつたりくるのが、私達ソフト部でございます。

さて、どんな類かと申しますと………。

だまつていても、松高のアイドルになつてしまふような、美人？ A N D カワイイ人の集まりで、どれをとつても、その顔には個性が飽和状態なのでございます。

その私達が熱中するソフトは、まことに優雅なもので、一人一人が発するかけ声も、ソブラノ・アルトとわかれており、ウィーン少年合唱団にまさるとも劣らない、すばらしいハーモニーでございます。

先輩も、女神のようにやさしく、黄金バットのようになのしい方々でございます。

他のクラブが、入つてきても笑顔でおむかえし、また笑顔でお送りするのでございます。

これでみなさんも、どれほどソフト部が、すばらしいクラブであるか、わかつていただけたことかと思ひます。

まだ、おわかりにならない方は、一度、校庭の一番端の、松の木を目印においで下さい。美人には似つかわしいバットを、振りまわしている私達の姿が、目に入ることかと思ひます。

体操部

ちょつとお目々を拝借。体操部でございます。

す。

先輩方の血と汗の結晶により、同好会から部に昇格したといういわくつきの体操部も今や重大な危機に立たされているのです。何と、部員が少ないのです。

みなさま、何故か体操というと、とつつきにくいもの、難しいものという感じを持つていらつしやるようなのですが、本当はちつともそんなことはないのです。

小さい頃からよくやつたでんぐり返しや逆立ち。こんな簡単なことから始まるのです。それに何といつてもうれいのは、運動部につきものの、あのイヤなイヤなマラソンがないのです。

確かに体操というのは、バレーボールやバスケットボールのように、みなさまとお近づきになる機会は少ないのですが、それは、だれもがそうなのです。我が体操部の部員たちも最初は、あんなことが出来るのだから、危くないのかな、といった不安を持つて、おそおそやつてきたものでした。しかし、みんな今では本当に楽しそうにイキイキとクラブをやっています。

体がカタイ、腕たてふせがダメというの心配無用。はじめは開脚で九十度も開かない

うちに悲鳴をあげていた者も、今では床にベ

ンタリ。腕たてふせにしても同じです。一年たつてごろんなさい。きつとクラスのみんなと明らかに差がついているはずですから。

先輩方もみな個性あふれる、楽しい（見てるだけで）人たちがばかりです。ね、先輩？最初は、おもしろ半分でもいいのです。やつてみましょう。おもしろい、つまらないというのはそれからでも遅くはないでしょう。もしかししたら、自分の人生を変える（オーバークана？）きつかけになるかもしれないのですから。

卓球部

我々卓球部は週に四回、活動を行なっています。すばらしい先生方の授業を終えて、眠くてボンヤリした頭をすつきりさせるために、いやいや、授業で一生懸命使つて疲れた頭をいやすために、放課後の一時間半、卓球の白い球を打ち合うよさは経験しない人には、わからないでしょう。ところでここで我クラブの練習内容をちょつと紹介しておきますと、まず土曜日は一時半から、その他の日は三時半から始め、全員で準備体操、素振りそして

先輩との一対一での練習。その間にトレーニングやロードワーク等一技術の向上とともに体力作りを行っているのです。我クラブの部員は一年・二年を合わせ三十数名、一年生はその大部分が初心者でありましたが、四月に初めて我クラブに足を踏み入れて以来、熱心に練習した結果、現在では先輩たちとも対等に打ち合える程になったのです。このように初心者でもやる気さえあれば、より強い精神力と体力を養ひ、どんどん上達できるのです。卓球は個人競技ですが、我クラブには全体としてのチームワークがあるのです。同級生同志は勿論、先輩や後輩とも気軽に話し合える雰囲気があるのです。そんなクラブにあなとも入つてみたいと思いませんか？我クラブへの入部に際し、年齢・彼・彼女のあるなし、顔のいいわるいは問いません。が我松原高校に通っているあなただけにその権利は与えられているのです。

テニス部

現在、都立高校で一番強いのが、この松高テニス部なんだって事、君知ってる？ その人達といつしよにプレイできるなんて素晴らしい

しいと思わない？ 練習はそりゃ楽しいよ。試合に勝つには相手以上の練習をしなきゃね!!部の雰囲気かい？ そうだなあ、極めて男女の仲がいいね。一つのテニスコートで毎日のように白球を追いかけていれば、自然と仲も良くなるのさ!! 部員はみんなやさしい奴ばかりさ!!ただね、軟式テニスには混合ダブルスがないから、彼女といっしょに試合に出るといことはできないのさ。でも練習ではいつもお互い助け合ってやっていけるのさ。なにしろ、テニスは自分がラケットを握ってコートの中を走り回らなきゃ面白さはわからないわさ。一度やってごらんよ。僕らいつでも君を迎えるべく、用意しているのさ。君のそのやり方って気持ちだけでいいんだ。今、プレイしているみんなだってそうだったんだ。中学の時やってなかったからって敬遠することないよ。高二で始めたって都内で上位に入ってるんだ。そりゃ試合に勝つだけがテニスじゃないけど、勝つ事も一つの段階なのさ。話は変わるけど、今のテニスコートは僕らが自らの手で作ったものなんだ。土は足りない、予算は出ないで困ったけど、僕ら一人一人頑張って作りあげたんだ。いわば、血と汗と涙の結晶さ。だから、なおさら、テニ

スの好きな君たちに使って欲しいのさ。何も迷うことはないよ。いっしょにプレイしようじゃないか。そうすれば、自らの青春を費やすに値する何かをつかむことが絶対できる。これなら確信して言えるのさ。コートの中で、何もかも忘れ、ただ白い球を打ち込む。これも青春の一部じゃないかな。さあ!! コートの中をいっしょにかけずりまわろうよ!

バスケット部

バスケット部の紹介ですか? 今さら紹介だなんて……。てれちゃうな……。え? どうしても紹介してほしいんですか? でも、もったいないな。一般庶民にただで紹介するなんてノル・クルから原稿料も出ないっていうのに……。でも、まあ、紹介してさし上げましょう。このクラブに入ったら最後、やめることはできないのです。これは、やめたらリンチされるというのでは決してないのです。バスケットの魅力にとりつかれてしまう、ということなのです。それに、マネージャーが、マネージャーらしく活動を行っているクラブでもあります。それから、美男美女がそろっ

ているクラブとしても、松高にその名をとどろかせているのです。まあ、おひまなら、体育館へお寄り下さい。汗にまみれて活動を行なっている、ひたむきな部員をみて、あなたも、感動に胸をふるわせることでしょう。

バレー部 (男子)

男子バレー部の部員は、みんな気はやさしくて力持ちの紳士ぞろいです。

まだこれといって新入生諸君に紹介するようない記録はありませんが、大会には常に三回戦まで勝ち残るチームです。

練習は、ただがむしゃらにしごくというのではなく、より効果的な練習をしています。夏には合宿があります。合宿所は、むしろ東京を離れてバスで約八時間ほどの、長野の山の中にあります。練習場は、我が校の体育館よりりっぱなのです。そこで部員たちは、汗だくになって白いボールを追いかけてまわります。きついのです。苦しいのです。疲れるのです。しかし、間の休けいの時に飲む水がまた格別においしいのです。練習が終わって最後の夜になると、コンパがあるのです。(これが合宿のハイライト) 先生、OB、部員、

マネージャーたちが、いっしょになってさわぐのです。歌、かくし芸、etc.

エーッ、今年我クラブは、春の関東大会を目撃にして、ただいま猛練習をしています。そしてその階段を、今着実に一步一步登っています。

今、我がクラブにはバイタリティーがあります! 着々と実力をつけています!!

新入生諸君! この活気の中に飛びこんでみませんか?!

P・S 女子生徒の皆さん。我が男子バレー部のマネージャーとして、緑の下力持ちになつてくれませんか?!

バレー部 (女子)



我々、女子バレー部は、二年生八人、一年生十五人、マネージャー三人から成り立って

います。そして、OBの方が、何人か練習を手伝ってくれます。何しろ、おもしろい、ゆかいな変り者の集まりで、とても楽しいクラブです。しかし、その反面、練習になると急に燃えだして、「鬼」になる人がたくさんいるので、練習中は、真剣、そのものです。そして、みんな、少しでも上手になろうと、一人一人が努力しています。そのうち、この努力がみのり、八王子実践など、相手にならないうえに、強いチームになるでしょう!!

先輩はとてもやさしく、後輩は先輩によく従い、OBは、とても熱心にコーチしてくれ、とても良いムードです。クラブ開始時間にはピッタリ、全員集まり、ボールは常に、ピカピカでまっ白。コートはいつも、石一つころがっていない美しいコート。とにかく、みんなやる気十分です。みんな、バレーがとっても好きで、クラブをやるために、学校に来てくれるような人ばかりです。楽しい中にもきびしさのある高校生活のクラブらしいクラブ。これが、女子バレー部なのです。

物理部

「C・C・C・C・C・こちらは、J・R・I・Y

TJ……。」と、毎度おなじみの出だしですけれど、われわれ物理部員はいつも、こう言って「オン・エアー」しています。物理部というと、物理の授業を連想してしまふ人もたくさんいるでしょうけれど、内容は、あまり授業とは関係のないことです。現在、物理部は、「ハム」と「天体観測」と「たこあげ」をやっています。

「ハム」は、みんなよく知っていると思いますが、とても楽しいものです。全々知らない人と、したしくお話をするのですよ。電波は、日本の人だけでなく、広く全世界にとどくのです。楽しいですよ。君も、免許をとろう! (……………)

「天体観測」は、お空にいつぱい浮いているお星をのぞくのです。けつして、となりの家なぞ見ませんよ。Hi Hi Hi……………。望遠鏡は、1200mm x 75mm・クッセツです。

秋の夜長を星とともに過ごすなんて、ステキですよ。

「たこあげ」は、物理的に計算したものです。すよ。しかし、たこは、計算したものがいちばんいいとは言えないにきまつている、けれど……………」

これらが、我々が日夜活動している内容で

ある。どうです。すばらしいでしょう。

なにしろ部員の質が違いますから。(ハイ)
昨年は、一年生の部員が少なくなりたいへんでしたが、今年は、ユウジ・ユウな一年生の部員が多数います。これからが楽しみなクラブですよ……。

「それでは、みなさん、また会う日まで、
73 さようなら」

東京都立松原高等学校

物理部 (J A I Y G I

/ J R I Y T J)

ブランバンド部

今日は、プラスバンド部です。みんなの中には、「僕に音楽的な才能なんて有るわけがない。だから、プラスバンドなんかに入部しても、しょうがないや。」と言う人がいるかもしれませんが。しかし、そんなことを考える必要は全く無いのです。みんなの中には、そういうことを言いつつながらも、歌謡曲やフォーク等を歌う人がいるのと同じで、そんな心配は一切いらないのです。楽器など手にしたことがない。などと言う心配は無用。現に、

我々の大部分も、高校に入學してから、初めて手にした者が多いのです。

部員も、とりどり、とにかくデカイ音を出すのが趣味だったり、マンガの主題歌ばかり吹いているの等々、面白いのがそろうてます。クラブ内は、なごやかな空気がみなぎっていて、先輩達も親切です。プラスバンド部という集団の中でしか味わえないものを、あなたも味わってみませんか？ 音楽の好きな人ならどなたでも、プラスバンドにどうぞ。

ラグビー部

我が松原高校ラグビー部は、過去、関東大会四回出場という輝かしい歴史を持っているのであります。しかし、最近になって低迷が続いているのであります。そこで、ついに部員一同が立ちあがり、松高ラグビー部復活のために力を入れたのです。そして、松高ラグビー部は復活しはじめたのです。部員の数も以前よりは増え、活気に満ちたクラブ活動を楽しんでいるのです。ラグビーというスポーツは荒っぽいヤツがやるという考えがあるかも知れません。しかし、それはまるつきり違います。我々のラグビー部にはそんな荒つ

ぽいヤツなど全然(?) いません。

ところでみなさん、ラグビーとは男のスポーツです。男だけのスポーツ、こんな魅力的なスポーツが他にはありますか？ これを読んだ男子諸君はラグビーをすぐにやってみようではありませんか？ ラグビーに関しては優秀な諸先輩方がとても熱心に指導してくれまう。どうです、だんだんと力をつけてきた松高ラグビー部にあなたも入って一緒にプレイしてみませんか？ そして一緒に関東大会に出場してみませんか？ 背の低いあなたも、背の高いあなたも、体重の重いあなたも軽いあなたも一緒にラグビーをやってみようではありませんか。強い精神力、忍耐力を養うにもこのスポーツにまさるものはないのです。

また女子の諸君、真の男のためにマネージャーとして力を貸そうではありませんか。その時、真の女らしさが生まれるのです。女らしくなるためにもラグビー部のマネージャーとして働いてみませんか。強い男に接近するチャンスでもあるのです。

諸君、我クラブはあなた方の若い力が必要なのです。二度とない青春をだ円形のボールにぶつけてみようではありませんか。高校という学園生活を有意義におくるためにもラグ

ビー部は最高の場所です。

同好会 棋道部

昭和四十八年にできた囲碁同好会に去年は将棋を入れて「同好会棋道部」として四月にスタートしました。つまり、囲碁と将棋がいつしよにやった方が心強いというわけなのです。以後、活動を続けてきましたがどちらかというと囲碁より将棋の方が活発でした。夏の高校選手権の東京都予選にも出ましたし、(結果はひどい)元全国大会四位という実績のある新宿高校と試合をしました。両校五人づつ出で行うこの試合、我校善戦むなく惜しくも、惜しくも(これを強調したい)二対三で敗れました。しかし、松原高校棋道部は永久に不滅です。囲碁の方はあまりパツとしませんでしたが、ナニシロ、永浜先生が控えていますから来年度は大いに飛躍するでしょう。

ともかく、御大と一年生を中心とする我部は楽しいのです(ほんとうは礼儀正しいの意味)。週二回の活動日が待ちどろしいくらいです(火曜と土曜の放課後、一D教室にて)。部員は気軽に打ち、指すことができ、気軽に

話し研究できるような人たちです。だからチームワークはグンパツ、心から囲碁将棋を愛する人たちの集団なのです。

さあ、みなさん、囲碁将棋のできる人、またはこれから始めたい人(親切に指導します)は手をあげてください。そうです。今、手をあげたあなたはもう、棋道部ファミリーの一員なのです。

(現在部員二十六名)

同好会

バドミントン部

我がクラブ(同好会)の昨年一年間の活動状況を報告します。

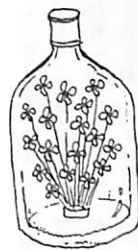
(一学期) ランニング、柔軟体操、フットワーク、素振り、他に敏捷性を養う各種のトレーニング。これらは随時行いますがこの期間に重点的にやり、体力養成に主眼をおいた。(夏休み) 本格的なシャトル打ち。基本的なショットから始めて何とか試合のできる態勢へもつていった。

(二学期) 試合の感をさらに養い後半はほとんど試合形式の練習。そして対抗試合。

(三学期) 主に試合。



コートの関係上思うように練習はできませんでしたが、発足二年目にしてなんとか試合までにこぎつけることができ、昨年は躍進の年でした。今年は昨年以上に頑張つてゆきたいと思います。



自己分析

過ぎ去りし或る日
短かくなつた冬の陽ざしがとうに隠れ、
もう七時をまわっていたらうか

私は店の灯りのまぶしい表通りを避けて、
かすんだ街灯の人通りの少ない裏通りを選ん
で歩いてみた。コートのポケットに両手をつ
つ込み、首を縮めて、本屋の帰りであった。
角を幾つか曲つたその時、

「誰かがつけている?」いつからだろう確かに
後ろから誰かが来る。

私はその尾行者が誰なのか知るべく、明る
い表通りへと抜けた。何くわぬ顔でショウウイ
ンドーに自分の姿を映し、あたりを探つた。
「いない、気のせい?」

誰も私などに関心を寄せていない。ただ通り
過ぎてゆく。

「気のせい」

気をとり直してまた裏通りへと入った。角を
右へ折れ左へ折れているうちに、私は尾行者
がいることに確信を持った。角を曲ることに
わずかにふり返る。尾行者は「背丈は私と同
じ位い、ひどく陰気な感じがする。うつむい
て、人が立ち止まると立ち止まる。私はおどし
て、私が立ち止まると立ち止まる。私は尾行
者を見届けるべく、いち早く角を曲つて、
今にも消えそうな街灯の下に立つた。角に目
をやる。

「来た」

私は目をうたがった。私の目の前に立つたの
は他ならぬ私であった。似ているなんていう
ものではない、私なのだ。

「××××××」

私は動揺した。××××××暗い裏道に私の目
の前にあらわれた私。夜の暗闇で浮き出され
た私の姿。表通りの華やかさの裏にいる私。
そのまま私は家へと向つた。玄関先であらた
めてふり返つた。

街灯には私の姿のみが浮き出された。

「夜の私」

私の姿は暗闇に投影されてより私らしい私
となつた。

朝立ち

目を覚ますとそこは真の暗闇だった。何も
見えないのだ。俺は光を捜して、手さぐりで
闇の中を進んだ。しかし、いけどもいけども
闇が無限の広がりを見せているだけだった。
俺は疲れたのでひと休みすることにした。

かたく冷たい地面に腰をおろして俺は考えた。
いったいどうしたんだ。あのあふれんばかり
の人々はどこへ行ってしまったんだ。あのビ
ルの群れはどこへ消えてしまったのだ。ヘド
をはきそうな排気ガスも、今となつてはやけ
になつかしい。

その時、俺は異様な物体が接近してくるの
を感じた。危険がせまっている。俺の野獣の
カンがそれを教えていた。

急に寒気が背中を走り、体全体に重圧感
のしあがつてきた。俺はバランスを失いたお
れた。耳もとに異様な声が響く。

「立て——、立つんだ——。」

除々に光が闇を押しつけてあたりを照した。
おぞましい顔を俺は見た。

「ケンジ、いつまで寝てるの。チョコクする
わよ!!」

夏



伊藤 幸子

むさくるしいガスと香水の臭いのする東京
を脱れて、館山に着いたのは昼過ぎだった。
涼しい冷房車からひきずられるようにして降
りると、とたんにひどい熱さを感じ、次に磯
の臭いを感じた。遠くに舟の汽笛が聞こえた。
私はなんとなく心がはずんで来た。

降りる客もめつたになく、職員すらめつた
に見えたらぬこの駅のもの静かな改札口を
出たら、私の目の前に土人が立っていた。い
や、彼は土人ではなかった。私がいま白
ために、彼のいかにも健康そのものと言え
る真黒な肌と真白な歯を見て私は、ためら
うことなしにケニアの原住民を思い浮かべた。彼
の名は義明と言った。明るくて心のやさしい
私から見れば少年であった。軽く挨拶をし、
彼は私の荷物を持ってくれた。二人は歩き始

めた。「義明、大きくなったナ。」と私は思
つた。彼と二人で海岸通りを歩いていると、
擦れ違う人が私達を見た。恋人同士と思うだ
ろうか、いや、そうは思わないだろう。重
うな荷物を持った恋人同士と海岸通りは、う
まく調和しない。それに、どう見ても私の方
が年上に見える。彼のイメージには、どうも
年上の女性に似合わない。

空はあくまでも澄んでいて、塗られたよう
に青かった。塗られた空、そう、こんな空は、
テレビ漫画か絵本ぐらいでしか見ることはで
きなかった。都会では、空を気にとめる者も
なかった。

海岸通りを抜けると、細い砂道に入った。

急にセミの声が大きくなった。彼はゴム草履
を脱ぎ、小脇に抱えまた歩きだした。「こう
すると歩きやすいんだ。」と笑つて言う。私
はサンダルではあったが、ストッキングをは
いていたので脱ぐわけにはいかなかった。一
歩踏み入れると砂がズズッと沈み、私の足跡
を作った。それは、私が重いからだ。重いと
言う事を私はうれしく感じた。しばらく行く
と叔母の家がある。そこまでたどり着くのに、
相当の力を費やしたように思い、疲れを感じ
た。やつとの事でたどり着くと、叔母が私を

出迎えてくれた。軽く挨拶をし二言三言話
したが、とても早口なので聞きとるのが大変だ
つた。そして声も大きく、やはり黒かった。
肩のがつしりした健康そうな人である。たく
ましさを感じた。海の女。彼女達は、夫が漁
に出ている間、家と子を守るのでこんなにた
くましくなるのだろうか。

私は、義明が荷物を置いたところまでは知
つていたのに、気がつくとは彼はもう家には
いなかった。私は、叔母と改まって挨拶を交し
た。母がよく親類の家でやっていたように、
なんとなく自然にそうだった。私は大人にな
つた気分になり、一人で来てよかったと改め
て思った。両親と来ると自由な事が出来ない
からである。そう、両親の前ではこんな場面
では、いつもおとなしくひっこんでいるのが
最も良かった。私と叔母は、勉強がどうだの
クラブが楽しいとか色々な世間話を始めた。

やはり早口で、方言と言ふのかお国なまりと
いうのか、それらの言葉が適当に混ざってい
たで、私は聞き取り、分析し、答を出すのに
苦労した。時にはそれが何であるか解明でき
ないうちに答えを出したりした。そういう時
にはいつもうなづくだけであつたのだが……。
一段落ついた形になると叔母が隣りの四畳

半程の部屋とおしてくれた。風通しもよく、近頃改築したらしくきれいだった。聞くと、今年の春改築したのだそうだ。そういえば何年前か前に来た時には、薄暗くて汚ない物置だったのを、おぼろげに覚えている。確かそこにはトウモロコシやジャガイモ等が石ころのように、ごろごろころがっていて、すぐネズミや油虫を想像することが出来た。そこがこんなにきれいになってしまつて、なんとなくその部屋が私の為に改築されたような感じがした。窓が西側にあり、そこからすぐ隣りの家が見える。どこの田舎もそうなのだが、解はなかった。隣りの家の部屋は子供部屋らしく小さな白いベッドが見えた。

私は閉めてあつた白のレースのカーテンを開けた。風は来ていたのだが、あけたらもつと来るだろうと考えたからだ。それにこの部屋にこのカーテンはない方がよさそうであつた。古びて開けるのに一苦労するようなタンヌ、仏壇等が置いてあつた。それらは遠い明治の頃を思わせるように懐しく、暖かだった。この部屋が当家の北の端にあり（最も部屋は四つしかないのだが）隣りと家がわずかしかなかった。陽は一日中殆んど入らず薄暗かった。部屋の薄暗さとタンヌの古び

た焦げ茶色が私を落ち付かせてくれたから。そして、その中でのは何の役にも立たなかつたからである。私は部屋の中で一番暗そうでタンヌのよく見える所に足を投げ出して腰をおろした。母は今頃何をしているだろう。外はもう薄暗くなつていて、遠くに船の汽笛が寂しく聞こえた。

「朝だ。」と思つた。私は蒲団の上に横になつていた。おそらくあのまま寝てしまつたにちがひなかつた。少し寒い。着ていた洋服がしわになつていた。

ジーンズにはき換え、白のスモックを着て私は部屋を出た。土間に散らばつていたげた音をたてぬようにわきにかかえ土間に降りた。ひんやりとした土間の土は気持ちよかつた。土間のこわれかかつた大きな木の戸を音をたてぬよう注意深く開けて私は外へ出た。すると白い何かが私の頭のあたりから舞ひあがつた。ドキッとした。あのおつかない猫だろうか。

この家には一匹の大きな猫がいて、私がイイ子をしようとしたら、カッと口をあけてくいつこうとしたことがあつた。その時はただひたすら驚いて、大声で助けを求めて泣き叫んだものだった。そのいへばあの猫は黒の

猫だつた。つ

今朝私を驚かしたのは休んでいた猫だつた。猫は猫でも海猫だつた。うす明るい空を見上げると多数の海猫が山からおりて来て、こちらの空一帯を高く低く舞つていた。私はげたをはいた。なんだかげたがあたたく感じられた。隣りの家の前をそつと通り抜けて海岸通りを渡り海に臨んで、堤防に腰を落した。隣りの家の前を通り抜けると、海までは二十米くらいしか離れていなかった。ただ通り抜けるのは、朝早くか夜遅くでない、と、縁側に若い男達が漁から帰つて来て常にごろごろと大きなずうたいを並べていたからである。

朝は静かでザブンと波の音、遠い汽船の汽笛、はしけの軽やかな音、その他は何もなかった。風は少し強く涼しかった。半ば顔を出した太陽が、海を、空を、私を紅く染めていた。そして裏の城山に陽のあたつてゐる所だけ緑の色が目ざめたように明るくなつていた。

海岸通りの遠くの方から一台の自動車がつて来た。見覚えのある顔である。だがそれが分るのに少しの時間がかつた。それが誰だか分らない時、私は恐かつた。目を離すことなくそのまゝ見ていた。しかし、その人物

が黒くしかも見たことのある肌だと分つた時、私の心の中に恐さはなかった。義明だつた。二人は互いに微笑んだ。どこへ行つて来たのか知リたかつた。昨日のあの時から会つていなかった。私が寝てしまつたのだが……。

義明は今中学二年のはずである。私はそれを知つていたが話すことがないので、「今、何年？」と尋ねた。「ああ。二年だ。」予想してゐた通りの答えが返つて来てうれしかった。ただ、「ああ。」という声のどうもバカにされたような気分だつた。太陽は大部上がり、空の青さが一層増してゐた。

家に戻ると朝食が出来てゐた。しかしまだ六時にはなつていないはずである。いつもこんなに早いのか、と聞くと、叔父が早く出かけるからだそうだ。叔父は港の木工所で働いてゐる。体格は小柄だが、筋肉のがつしりした、やさしい人である。やはり黒かつた。私は昨夜、夕食をとつていなかったで、一緒に朝をとることにした。自分の家では朝食は減多にとらなかつた。食欲がないのと、毎日のように朝早く医者へ通つていたからである。久しぶりに食べた朝食はお初にお目にかかるものばかりで、自分の食卓とは随分異なつてゐた。生野菜に牛乳がなかつた。その代りに

きゅうりのぬか漬けとワカメの味噌汁があつた。そして、くじらの干した物が出た。少し塩味がきいていて、黒く、かたく、さきいかのようでもあつた。ゆで卵の代りに生卵で、私はそれをひとつもらい、湯気のたつ御飯にかけて食べた。「いける」と思つた。しかしそのひとつの生卵は、後で私の胃の中で上手に溶けず、どろどろとした流動物のまま残り私の胃の中をあらしまわつた。やけにむかつくのである。私は朝飲む薬を今朝は二錠飲まねばならなかつた。

その日は朝からむし暑かつた。ジリジリと太陽は外に出た私を、砂浜を焦がした。熱い私はこのままこの暑さの中で焦げていくのだ。そう、それは焚火の火がメラメラと燃えていくように、そしてちつぽけな何の重みも持たぬ灰となつてどこかに飛び去つてしまふのだ。私の姿・形・面影さえも残すことなく。私は今、生きてゐるだけの存在なのだ。死んでからは何も残らない。私はその熱い身体をさましたかつた。もう一度生き返りたいと思つた。

二時頃、私は水着を着て一人で海に入つた。海水はとても冷たかつた。腰のあたりまで入ると波の抵抗を大部受け、立つてゐるのに疲れた。しかしそのまゝ沖へ歩いていった。胸

のあたりまで来たら急に高い波が来た、私は海中にもぐつた。あまりに急で私は少し海水を飲んでしまつた。それほど塩辛くはなかつた。が、鼻の中に入つてしまひ苦しかった。浜の方に向かってあわててかけていった。足がもつれてしまふ。やつと浜へたどり着いて、私は砂浜にしばらく横になつてゐた。

空の色は朝よりも一層青く紺碧色をしてゐた。海猫が沖の方で餌を探してゐるらしい、白い影が海の中へつっ込んだと思ふとすぐさまその影はぐんぐんと上がつていき、しばらく大きく小さく輪を描いてゐた。近くの小島のあたりに大きな入道雲が見えた。たいいていの人ならあの雲に乗つてみたいと思ふだろう。だが私はあの雲に乗りたとは思わなかつた。この熱い砂浜で焦がされてゐる時、私は『生』を感じてゐることができた。

彼はどうしてゐるだろうと、ふとそう思つた。やはりあの時から姿が見えなくなつてしまふのだ。しばらくすると二十米位沖の方で「おーい。」と手を振つてゐる。いつものニコニコ顔で……。私もいつのまにかニコニコして「おーい。」と首つて砂浜で彼の帰つて来るまで立つてゐたものだ。いつだったか、私がビーチボールを沖へ流してしまひペソをか

いていたら「バーカ。」と首つて波の中へ消えていった。その時は、時間がかかったように思われ、誰もいなくなつた陽の沈みかけた浜辺で一人待つていた。しばらくするとビーチボールを頭の上のせて片手で、こちらへ泳いでくる彼を見て、ほっとしたやううれしいやらで、唯一人泣きじゃくつていた。どうしたのかと思つたのだらう、義明も「俺、泣かしてナイヨ。」と首つてベソをかいた。

そんなことを思い出していつの間にか一人でニコニコしてしまつていた。私は家へ戻つた。誰もいなかった。静かだった。土間の上がりがばな腰かけていると後ろから誰かが私の目をふさいだ。「彼だ」と思つた。しかしその手はいく分小さかった。弟の勇の手であつたやうに黒く、歯の白いのばかりが目立つ黒ん坊だ。「今は小学校に行つてゐるの。」と尋ねると、「夏休みだから行かなくてもいいんだ。」と首つてしまつた。四年生の勇は上級生なのだ。小学校では「おにいさん」と下級生に言われて、みんなの面倒をよく見てあげるのださうだ。彼は宿題はもうすぐ終わるが少しわからない所があるので手伝えとのことだった。それはワークブックの算数の集合の課題である。彼は今まで一生懸命わら半

紙に図を書き計算したが、どうしても合わないらしい。その問題をどうにか私も解くことが出来た。勇は得意になつていた。「何故お兄ちゃんに聞かないの。」と尋ねると、「兄ちゃんはバカだつて母ちゃんが首つてた。」と言つた。しかし彼の成績は必ずしも「バカ」という程劣つてはいなかった。私には到底得ることのない「健康優良児」になつてゐるし、数多くの賞状が義明の部屋には掲げてあつた。私は健康がうらやましかつた。体育の授業は見学、欠席も一ヶ月に何日は必ずする私は、その時には彼の偉大さを感じたもの。

それから二十分程たつたさうか、自転車の止まる音がした。義明かと思ひ私はすぐにも出て行きたかつたが、止めた。なんとなくそんな私を義明に悟られさうで、くやしいのである。しかしそうは考えなくても良かった。私は期待を裏切られてがっかりした。叔母を恨めしくさへ思つた。そう、叔母が帰つて来たのだ。勇は叔母に宿題が終わつたことを告げた。そして、勇は叔母の買ひ物のかごとをかつた。アイスクリームが入つてゐた。帰つてくるといつも入つてゐるらしい。そのアイスクリームをなつかしい「都会の味」のような気分で食べた。

私は祖父の墓参りすることにした。線香と涙の庭に咲いてたダリアの花を叔母が持つてきてくれた。私はそれを持つて寺への道を聞いた。何だかややこしくてよくわからなかつた。うれしいことに、勇がついて来てくれるのである。更に、いつ帰つてきたのか、義明も一緒に。私はこの機会にいろいろな話をしようとした。

墓は城山の裏にある。ここから大部遠い。例の砂道を過ぎて、バス通りを渡つて、砂利道を小さな川に沿つて歩いてゆく。川の側には柳や竹がびっしり立つていてうす暗く涼しかった。半分水につけて平たい石の上に大きなカエルが、体を休めながら私をずっと見ていた。空びん等のゴミはあつたが水は澄んでいた。五十米ほど歩いてそこを左に曲つた。柳やカエルとは別れて今度はトウモロコシの畑が右にひらけた。陽に花畑があつて、真赤なラジオオラスのびのびと咲いていた。急に明るくのびのびとしたさわやかな気分になつた。どこの家でも花畑があるさうだ。しばらく行くくと舗装された道に出た。そこを右に曲つて少しのところに北条小学校がある。勇君は、その小学校のおにいさんだつた。木造平屋で四棟平行に並んでいて、渡り廊下

で結ばれてゐた。別な所に洗面所があり、そのガラスは透明なのだが、ほこりでくもつていたし、殆んどが割れていて無傷なのは四枚しかなかった。その校舎のむこうでは何やら工事をしてゐた。勇は「三階建ての校舎をつくるんだ。」と得意げに言つた。

義明の通つてゐる中学校は海岸通りをしばらく行つた所にある。そこまで自転車を通つてゐるさうだ。そこにはプールがあり、義明はその水泳部のエースなのだということを知つた。自転車を通つたところまでは義明に聞いたが、その後のエースのことは勇に聞いた。そう言われてみると思い当ることが幾つかある。彼の部屋に、県大会などの賞状があつたさうだ。

祖父の墓はきちんと整理されてゐた。私は枯れた花を生け直し、墓石に水をかけた。義明が線香を束にしてつけて立てた。祖父は煙草が好きなんだつたさうで、死ぬ直前まで手にして放さなかつたさうだ。頑固で、祖母を大分泣かせたと聞いた事がある。

墓参りを終えて、またあの小学校にさしかかるころ、陽は大分落ちて、西の空が朱くなりかけていた。海猫が、城山の巣に戻つて来る。さびしそうな鳴き声をあげて、私も、明

日はまたもとの生活だと思つて寂しい。いやそれよりこの二人と別れてしまふことの方が寂しかった。

何かは分らないが、あの二人には普通と違ふものがあるさうな気がする。兄弟愛と言われているものだらうか。しかしこの二人を見ていて、そして一人一人を見ていて、なんとなく好意を感じる。弟がおかずをねだると兄は「欲しいの」と首つて皿にのせてあげる。弟は兄の自慢をし、兄が居る時は大いにだだをこねる。年が離れているからであらうか。そのくせ、二人はいつも一緒にゐない。食事と風呂と寝てゐる時だけ同じ屋根の下にいて、あとは同じ屋根の下にゐる事はめづらしい。だからかもしれないが私はその二人の中には入れなかつた。そうこの土地にゐるには、私はあまりにも白すぎたのだ。肌だけでなく、心までも。それは自分だけでなく、環境にも左右されているのだらう。なぜなら、この土地の人はみなまっ黒だからだ。この人を見ていて、何故か私は、暑苦しさやけだるさを感じない。花までも。そう私自身も黒くなる事はできたのだ。しかし、もう遅すぎた。私はまた白の世界、つまり自分を押し縮め、暑苦しく、うす気味悪い世界の人間であり、

そして仮りにのがれたとしても、それは一時なものであつて、明日からはまたそこへ帰らなければならぬ。残念だつた。

東の空に半分かけた月が出た。一番星が出た。明日も館山は晴れるだらう。そしてこの二人はまた別々になり、またこの屋根の下に居つて来て……という生活を送るだらう。他の人物が入つて来てもそれは決して変わらない。明日の一番の東京行きで私は発つ。早い内に帰つてしまおう。少しでも早くこの土地から離れていきたい。今日の内に彼ら二人と別れを告げる事にした。

「また来いヨ」と勇は首つてくれた。少しの間、私は顔をこわばらせたが、笑つた。義明も笑つた。とうとう義明とは何も話せなかつた。まるで失態でもしたさうな、そんな気分だつた。

やはりこのあこがれの世界は彼ら二人だけのものであり、私の入るすきはなかつたさうだ。

さうなら二人。さうなら館山。窓からは無数の星が見えた。私は床に入つて静かに目をつむつた。

遠くに沿の汽笛が聞こえた。

記憶の残像

お前は崖下に横たわる
死した海の残像なのか

ブドウ酒色の

お前の体液の中を
ちぎれた魚がとびまわる
震える時が刻まれる

お前は死した海の化身なのか
セレブスの像のごとく

お前の体にのしかかる
古びた過去の街角

溶けた時が
最後の
叫びをあげる



稲川信彦
『たくらみ』から

おわりに

こたつで玉子とじうどんをすすりながら、消書にペンを走らせて過した季節が終り、残ったものはインクのしみと悔いだらけ。虫くいだらけだった。

自分のだらしなさと計画性のなさがつくづく身にしみた。虫歯もしみた。馬鹿さ加減も程々に、そう思って暮らしたつもりだったのに。加えこんだ赤字の額に、疑問がわく。

誰も不思議に思わないのだろうか。生徒会誌の存在に。

生徒会誌って何だろうか。編集で幾度も考えた。生徒会誌を生徒会誌として存在させるにはいかにすべきなのだろうか。生徒会活動が下り坂になるとともに、生徒会誌は生徒会誌のもつ意味を変えてきている。

(私の責任転嫁の意識が大きいことは認める)

私は私なりに特集をやめたことには意味があると思っている。

編集 万木・永井・堀・今・

山本・広沢・吉村・

上保・福井・佐々木・

高岩・大野・高木・

葛山・児玉・林・伊藤

小山・笹島・鈴木

協力 生徒会総務

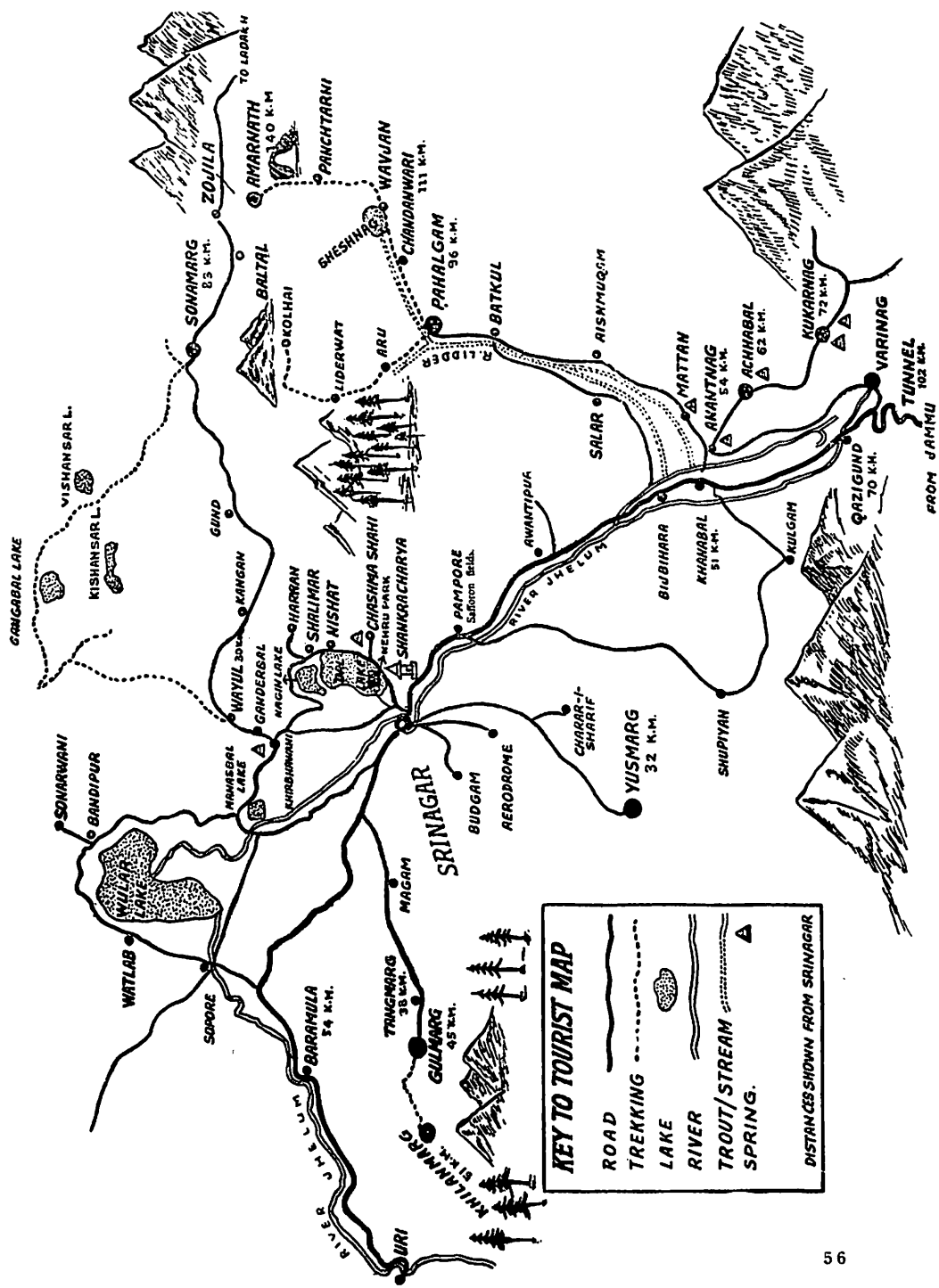
伊藤・明石・鈴木

顧問 永浜先義



LE COEUR





③

KASHMIR

永浜 先發

これからわれわれの行くカシミールは、行政上は、ジャンムミール州といい、インドの西北部の地域である。

北はカラコラム山脈によって中華人民共和国の新疆ウイグル自治区に接し、東はヒマラヤ山脈の西端となり、南はシワリク丘陵によってインドのパンジャブ州に、西はナンガパルバット山（八一二五メートル）から南下する山脈によってパキスタンと接している。

この一大盆地（あるいは渓谷）は、かつては一大湖水であったが、西方の一角を破って流出し、乾湖となり、ウーラー湖やダル湖等を残して盆地となった。風光明媚であるとともに土地も肥沃で、米、豆、トモロコシ、大麦、野菜等がよくできる。またサフランの栽培が行われ、これは薬用に用いるほか、ヒンズー教徒がその階級を表わすために額につける記号の顔料ともなる。果物も豊富で、桑実、リンゴ、ナシ、クルミ、アンズ、スモモ等を産する。山に囲まれているから木材の産も多く、デオダル、チェナール（篠懸の木）、樺、胡桃、桑、楓等の良材を出す。

また羊の群が牧草を求める姿にも接することができる。工業製品

としては絨毯とカシミヤ（本来は山羊の縮毛を原料とする目のつんだ斜紋織物であるが、高価なのでメリノ質の羊毛を原料とする）がある。

インド独立前、藩王（マハラージャ）はヒンズー教徒であったのでインドに属したが、住民の七七パーセントはイスラム教徒であるので、パキスタンとの間に帰属問題について紛争が絶えない。また一方、州の北東部ラダク地区は中国との間に問題を起こし未解決となっている。

東伝仏教の出口がカシミールであることも関心がある。このカシミールを経て中国（前漢）に仏教が入り、朝鮮（高句麗）を経て、百済から日本へ仏教が入ってきたのは六世紀の中頃であった。日本仏教の故郷でもあるわけだ。B・C・二五〇年ごろ仏教はこの地で盛んであった。また唐の玄奘三蔵は、六二七年二六才の時、仏教を直接インドに求めるため出発し、シルクロードを経て一年後に迦湿弥羅国に着いた。「大唐西域記」にスリナガルの町に寺が一〇〇以上、僧が五〇〇人以上いたことが記してある。当時の仏教の隆盛が想像される。

カシミールの北端は、ほぼ北緯三七度だから日本でいえば福島県のいわき市と平市の間、東北本線的那須にあたり、南端は北緯三二度三〇分だから、九州中央部の八代市に相当する。「私がカシミールを訪れたのは昭和四五年（一九七〇）の八月のことである。」

八月二日（水）SRINAGAR（34°08'N, 74°50'E）ニューデリーのインベリアルホテルで眼がさめたのは四時五〇分。五時三〇分、トランクを廊下に出す。（ボーイが運搬して自動車に



SRINAGAR, Dal Lake上のShikaraの野菜売り。前に居る男が水煙草を吸っている。



KASHMIRの首都SRINAGARの北東部にあるDal Lake。岸に浮いているのはhouse boat。

る。ジェルム川の堤防を経て橋にかかる。橋は両端に必ず警官が立っている。ヒンズー教の寺がある。街に入ると、煉瓦と木材を使った五階建の大きな家が多く、一番下が店になっている。ブルカとよばれる黒衣を頭にかぶった女も見られる。

ロバが荷物を運ぶ。左側に学校らしい建物がある。ティーチャーズカレッジと書いてある。やがて川沿いに行くとダル湖岸に着く。ここで下車、シカラ(shikara)とよばれる小さなボート(櫓で漕ぐ)が唯一の交通機関だ。屋根がついていて、ソファアが向いあいに置かれ、安っぽい色のついた布で飾っており、カーテンなどがかけてある。四人乗り程度の小舟である。これらが沢山湖岸に寄ってくる。今日から暫らく宿泊する家は、湖の対岸に浮かぶハウスボートである。シカラに乗って、湖の対岸に行くと、ハウスボートが沢山並んでいる。僕の泊るマラヤと称するハウスボートは、長さ一二五呎(約三八メートル)幅一五呎(約四、五メートル)ボートの入口から入って第一の部屋は応接室兼居間で、ソファアや椅子、テーブル、書棚などが置いてある。次の部屋は細長い六畳位の食堂、長いテーブルに椅子がある。次は調理室。左側に廊下があつて、部屋が三つあり、その一番奥が浴室になっている。トイレは各部屋毎にある。ここに六人泊ることになる。午後四時まで自由時間。

四時集合。シカラで対岸の港まで渡って行く。ここからバスでムガール庭園を見に行くのである。港の近くにはオペロイズパレスホテルがある。そのうしろの山はシャンクラチャルヤ丘という。頂上にヒンズー教の祠がある。これからムガール庭園を四つ見るのであるが、第一の庭園はシャシマハ(Chashma Shahi)

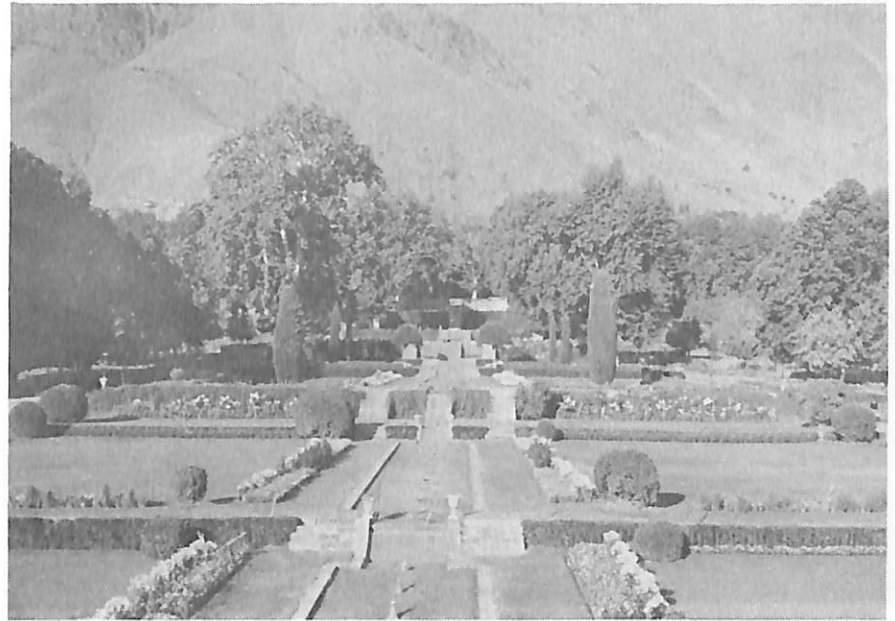
(王の泉)といわれる。ムガール朝の第五代シャー・ジャハン帝

積み込んでくれる。)六時二〇分下のロビーに集合。六時四〇分、バスでホテルから空港に向う。雨のため水滴が窓のガラスを流れる。七時バラム(Baram)空港に着く。私たち一行四〇人がプロペラ機に乗り込む。七時四〇分空港発。高度は約五〇〇〇メートル。窓から山、湖、耕地、集落等を見下していたが雨は次第に激しさを増してくる。もう何も見えない。雷が鳴る。電光が走る。翼が上下に揺れるのが見える。ギー、ギーというような音がして今にも空中分解しはしないかと思われる。しばらくすると窓にバラバラと霰がたたきつけられる。すごい荒れ模様である。

やがて雨も小やみになり、山が見えてきた。湖が見える。空港が見える。大地がぐんぐん近づく。九時三〇分、無事スリナガルの空港に着く。ニューデリーから西北西へ約七〇〇キロである。ここで第二便の来るのを待つ。空港には兵隊が警備していて何となく緊張した感じをうける。写真も撮影禁止である。向日葵やコスモスのような花が咲いている。気温二五度。スリナガルは北緯三四度三〇分なので下関とほぼ同緯度に当るし、海拔二〇〇〇メートルなので涼しい。

印パ戦争(一九七一年)の直前であるから緊張状態を感じさせる。一〇時三〇分第二便(ジェット機)が着いた。第三便は欠航との由。バスに分乗して空港を発。アカシヤの並木道を下って行く。もう茶色に色づいた広葉樹の葉もある。煉瓦の工場がある。テント生活者の群も見える。

やがてボブラの並木道となり、左右に水田が展開する。北海道を思わせる風景である。傾斜地には黒い羊の群がみえる。桑の並木となる。楓の木も多い。リンゴ園、キビ畑等がある。軍隊の兵営もあ



SRINAGARのムガル庭園のうち、Nishat (歓喜の庭)。中央に一直線に並んでいるのは噴水の口であろう。

(一六二七一六六六)の避暑地である。小高い丘の上にあり、かなり急な傾斜地に階段状の庭園がある。第一段の芝生でインド人が水煙草を吸っている。煙草の煙を水で冷やして吸うのだという。余りあわてて強く吸うと水が入ってくるのでゆっくりと静かに吸わねばならない。

中央に泉があり、こんこんと冷たい水が湧出している。この水は薬用効果が大いという。コーランに「極楽には水有り。」とあるが、ムガル庭園は大いに中央に細長く水をたたえ、その左右にシンメトリーに草花や樹木が配置されている。

ここから北へ約四キロでニシャット(Nishat)(歓喜の庭)に着く。ヌールジャハン妃の避暑地である。ムガル朝第四代のジャハンギール帝(一六〇五—一七二七)は、父アクバル大帝に似て精神的な野心家であったが、その治世の後半は、ベルシャ人の美妃ヌールジャハーンが、ムガールの国政を左右したといわれる。そのヌール妃のために造られた庭園で、一〇段のテラス状の庭園になっている。

ここから北へ約三、二キロでシャリマル(Shalimar)(愛の住家)に着く。ここはムガル帝国の第四代ジャハンギール帝の建設した庭園である。愛妃ヌールジャハーンとの愛の住家であったのであろう。

更に西へ四キロ行くとナシーム(乾風の庭)に着く。ムガル帝国の基礎を確固たるものとした第三代アクバル大帝(一五五六一—一六〇五)の建設したものである。いずれも宏壮で規模雄大な庭園である。今は市民に開放されている。左右の端は大きなブラタナス(篠懸)の大樹が茂っている。この地方ではシナルといわれ、カ

シミールの象徴とされている。これら四つの庭園を総称してムガル庭園という。

さて帰途日本人の数人と会った。それらの人はオイスカから派遣されて来ている人々の一部である。(註 OISCAはOrganization for Industrial Spiritual and Cultural Advancement-International)つまり「産業・精神・文化を高揚するための機構」略してオイスカ産業開発団といわれる。)八人派遣されて来ている。三年間の予定。班長高宮君は一九六六年六月からカシミールに入って四年目、農業指導に当る。(稲作、野菜、マッシュルーム(日本種)、果樹(リンゴ)、ガーデン(日本人の美的感覚を生かしたデザイン)等。)言葉には苦労した。稲作は一反当り収穫三、四俵位で低い。土質が粘土質であること、堆肥を作ったり水を溜めるといことがない、鳥や昆虫の被害も多い等による。日本との農業の開きは大きい。現地の希望をとり入れて、年間を通じた土地利用を考えて指導していきたい、というようなことを話してくれた。

八月三日(木) SRINAGAR (Kashmir)

自由行動、ショッピング。

小鳥の囀る声で眼がさめる。蛙の鳴く声も聞こえる。あとで聞いたのだが、それは蛙ではなくてキングフィッシャー(釣りの王様)という鳥であることがわかった。その鳥は、嘴と頭が黒く、眼のうしろが白、背は玉虫のような光沢のある碧色、両翼は濃い青、腹側は薄茶色、体の大きさは鳩と雀の間位で、嘴が長いのが特色。湖の上二、三メートル位の所で翼をばたきながら一定の場所について、

獲物である魚が見えると急降下して魚をくわえて飛び上るという早わざを見せるのである。

ハウスボートの岸に近い所は一つばい蓮の葉で掩われていて、三四輪ピンク色の蓮花が開いている。午前中休養、雨、気温一九度、一昨日迄の三五度前後の炎熱のインドに比して別世界の感がある。

午後、雨は一向にやみそうもない。午後自由行動との連絡があったのでショッピングに出かける。同宿の六人で、対岸に渡り、タクシーでスリナガルの街に出かける。最初の店は絨毯や紙細工の美麗なものや、カシミヤのショール等を売っていた。ショールには刺繍がしてある。更に街の中心まで行く。「ヴィクトル・ブラザーズ」という店で買物、僕らと一行の者がどんどん買うのでついつられて買う。毛皮の店である。豹の毛皮のハンドバッグ 二〇ドル、豹の帽子 二ドル、ジャンパー 二〇ドル等。一旦ハウスボートに帰って、管理人に買い物のことを話すと、それは高い、もっと安く売る人を連れてきてあげるといふ。

夕食後、シカラで毛皮を売る西蔵人が来た。狐の首巻き一八ドル、毛皮手袋二ドルだった。一ドルは銀行で交換すると七三ルビだが、直接ドルで買物をするときは二二〇ルビの計算になる。隣のハウスボートに西蔵人の商人が骨董品を売りに来ているから見に来ないかといってきたので見に行く。

八月四日(金) PAHARGAM

六時三〇分起床、八時三〇分湖岸の港に集合、八時五〇分、バスでダール湖を出発、スリナガルの街をぬけてジェム川に沿った道を南東へ走る。川の岸辺には柳の木が見える。ポプラの木が多く眼



Awantipulのヒンズー教寺院の遺跡。

につく。これから辺境の町に入るので、バスの各機能のチェックが行われる。軍隊の兵営が見える。水田が両側に展開する。稲は少し黄色味がかっている。製材所がみえる。バスは斜面を上って行く。牧草、トモロコシ、リンゴ園、桑畑などがみえる。水田に縄をはりめぐらして、棒杭に古い衣類などがかけてあるのは雀を追っばらうためのものであろう。日本の農村風景と同じである。

九時三〇分、アーヴァンティプル(Awantipul)テンブルの遺跡に到着する。下車して道路の右側に少し上っていくと石造のテンブルの跡がある。ヒンズー教のシヴァ神を祭る寺で、紀元前からあったが八八五年に再建された。石柱や門、敷石等がのこっている。ムガル帝国(一五二六—一八五八)の時破壊された。アーヴァンティ(Awanti)という僧が発見したという。九時四五分同地を出発。スリナガルから南東へ五キロの所にカナバル(Khanabal)という小さな町がある。そこから東へ進むとマタン(Mattan)という町につく。一〇時二〇分。そこにヒンズーの小さな寺があつて、その下から泉がこんこんと湧き出ている。その流れの五〇メートル下流に石造の洗濯場があり、多くの女達が洗濯をしている。直径二—三メートル位のシナールの大樹が沢山あつて林をなしている。一〇時四〇分、この町を出発。針路は北へ向う。水田が開ける。氷河の侵蝕した地形であると思われるU字谷がある。バハルガムの町を通り抜け、ナタラージホテルに着いたのは一一時四五分。スリナガルから九六キロ距っている溪口集落である。

午後は自由時間。バハルガムの町へ下って行く。傾斜地にはデオダルというヒマヤ杉の一種が亭々とそびえている。デオダルは五葉の松に似ているが五葉の松の葉よりやわらかで長い。林の中の空

地に隊商が二〇人ばかりテントをはって野営している。ロバも二〇頭位いる。町は一本の街路に沿って約三〇〇メートルばかり店が並んでいるに過ぎない。その街路は、リデル川と平行している。町の北端に回教寺院があり、お祈りの声が拡声器で放送されている。お祭でもあるのか、人々が大勢集まっている。

街路に面した家は四—五階位の大きな家で煉瓦と木材が使用されている。木材は豊富であるのに家の大きいわりには材が細い。道路に面した店は門口一間半位にしきられていて、一階の店の中を経ずに二階以上に行けるように階段が外についている。店の商品をのぞいてみる。八百屋さんは、ピーマン、ジャガイモ、白いナス、果物、タルミ、コンショウ、落花生等が眼についた。土産物店は皮製品やカシミヤウール、絨毯、宝石類、木製品、骨董品等、食料品店では、チャパティー(インド人の主食で、煎餅のように小麦粉を焼いたもの)やパンを売る。回教寺院の前には露天市も出ている。売っている人は顔がわれわれに似ている。尋ねてみると西藏人だという。何か親近感をおぼえる。ホテルに帰る。気温は二五度。

雲で今まで見えなかったが白銀の山が姿を見せてきた。白銀といっても雪ではない。岩が太陽の光を受けて白く光っているのだ。その山へ下から雲がどんどんはい上っていく。

午後五時、二一度。インド人の金持の避暑地でインド人の泊るホテルなのか、何となく臭いがして一寸ムカムカする。夕方は半袖シャツではいささか寒い位。鳶がピーヒョロロと鳴いては大空を飛んでいる。道端には野菊が咲いていた。

八月一日(土) PAHARGAMからSRINAGARへ

朝、雨が降っている。気温一八度。日本画のように雨にけぶって山が幾層にも見える。せせらぎの音が聞こえる。七時頃二階の窓から見下すと隊商の一行がロバを曳いて集合している。顔の色は褐色、痩せ型で精悍な感じ、蒙古型の顔。ここから北東へ約四四キロ程行くとアマルナス(Amar Nath)という所がある。その洞穴に神聖な祠がある。海拔三八九〇メートル(富士山より一四メートル高い)にあつて、その洞穴のなかに氷のシバリンガがある。そこから流れ出てアマルガンガ川になるのである。ここは祭が一七日だそう、その日には多くの巡礼者が集まって来て、彼等は短かい期間ここに滞在する。それら巡礼者を対象として、これらの隊商が幾組か、土産物品や生活必需品等を売るために行くのだろう。(これは数日後の新聞で知ったことだが、彼等隊商の一隊が遭難したということであった。)彼等の一行が集合し出発しようとしたものと静かなデオダル(ヒマヤ杉の一種)に囲まれたホテルにかえる。雨は降るし、堀田善衛の「インドで考えたこと」を読む。一〇時頃、一寸陽がさしたが一〇時四〇分頃にはまた雨が降り出した。午後二時バハルガムを出発、途中で一回休憩し、三時三〇分、スリナガルに着く。ダル湖のハウスボート「マラヤ」に帰る。

八月二日(日) GULMARGへ

八時三〇分、湖畔の港に集合。「サラマレク」(お早ようの挨拶)も憶えお互に現地語で挨拶をする。今日はスリナガルから西方へ四五キロの所にあるグルマルグという高原に行く。昼食はそれぞれの

ハウスボートから二人ずつ、管理人とボーイが持参し、むこうで暖めて出すというのであるからぜいたくな話である。一つのハウスボートが客六人だから、六人に使用人二人がつくことになる。労働力が安いからできることであろう。

九時二〇分、ダルレイクの港を出発。バスはスリナガルの街を通り、北西への道を走る。まもなく水田が展開する。道は立派で両側にボブラの並木がある。道ばたでアヒル、牛、山羊などが遊んでいるのが見える。スリナガルとグルマルグとの中間のマガム(Magum)で一〇分休憩。公立のハイセコンダリースクールがある。更に西へ走る。扇状地の扇端部から扇頂部へと向けて行く。水田用の灌漑用水路が見える。スリナガルから三八キロ、ここにタングマルグという溪口集落がある。TANGは馬車の車のこと、MARGは庭のことだそうである。海拔二一〇〇メートル、気温二五度、ここで三〇分休憩、小さな街村である。ボニーが沢山寄って来ては乗れ乗れとすすめる。

ここからは愈々急な山道になる。ヒマラヤ杉の一種、デオダルが多い。薬草栽培地もある。まもなく高原になると木はなく、草地で牛が放牧されている。グルマルグに着いたのは正午であった。草原に大きなヒュッテが幾つか点在している。ゴルフ場もある。ヒュッテまで約一五〇〇メートル位だろう。所々高山植物の黄色い花やピンクの花の群落があるが、名はわからないが美しい。この野外で夫々のハウスボート毎に一つの家庭のように持参してきてくれた昼食をとる。一二時三〇分、急に雨が降ってきた。急いでヒュッテにかけ込む。寒い、寒暖計を出してみると一八度。アップライトのピアノがあるので蓋をあげてみる。半分位は音が出ない。三〇

候は変わり易くなかなか見ることのできない一瞬だった。

五時三〇分帰着。夜、例によってシカラで土産品売りが来た。

八月十七日(月) SRINAGAR

私たち一行は一三〇人。シカラは四人乗りだから、三〇数艘が、ダルレークを北へ漕いで行く風景は壮観である。シカラの大艦隊の出動である。南下して行くと橋のところに閘門があり、我々の進路は妨げられた。向う側の水位を高めるためなのかここで約一時間待たされる。ここから運河に入り、スリナガルの街を囲繞している口の字型の運河をめぐる。運河の岸辺にも幾つかのハウスボートが繋留されていた。屋根は切妻板葺で、葎がかけてある。甲板には洗濯物の乾してある舟もある。一生をこの舟の上で暮す人たちだろうか。運河から街を見ると、裏側から見ることになる。大きな五階位の煉瓦と木造の家は、張り出し窓、テラスが川の上にせり出しているのが多い。カシミール州の政庁は煉瓦造り四階、その敷地の一部にヒンズー教の特色ある形の金色の高塔のある祠がある。運河の所々に石段(ガート)があり、そこから舟に乗り降りでき、また女たちはそこで洗濯などしている。こんな汚ない水で洗濯したらかえって汚れるのではないかと思う。ガートでは子供たちが一ぱい集まって来て、われわれに

「ミーマーサラーム、バテバテサラーム」と何べんも叫んだ。ミーマーは男性への呼びかけ、バテバテは女性への呼びかけ、サラームは挨拶で「今日は」とか「さよなら」ということだとのことだった。が真偽の程はわからない。しかしその無邪気な子供たちの顔から悪口ではなさそうだと判断される。そしてリズムミカルに叫ぶ。「サラ

分位だったかと思うとまた晴れてくる。遙かの山ひだにまだ雪の残っている山がみえる。帰りはボニーに乗る。三ルビーという。バスの待つところまでいい気持で乗って行く。下りるところで馬曳きに三ルビー払うと、更に三ルビー出せという。何故なのかわからないが途中で止めて写真を撮ってもらったからであろうか。そのうち馬曳き連中が多勢集まって来て僕を取り囲んだ。これは困ったことになったと思っていると、僕等のバスの運転手がやってきて、どなりつけたら一せいに逃げて行ってしまった。バスの運転手はシート族である。ここでシート族のことを簡単に説明すると、シート教を信ずる一部族で、髪を相撲の取(トリテキ)のように束ねてターバンを巻くこと、ヒゲを剃らぬこと、酒タバコをのまぬことなどの戒律を守っている。インド軍の中堅で、スポーツの選手、技術者、自動車運転手等中堅的な存在であり、勇敢で誇りをもっている。アーリアンの系統だろう。美貌の人が多い。シート教は一六世紀初めにナーナクが説いた宗派で、イスラム教の影響を強く受けたヒンズー教の改革派で、唯一普通の神の存在を説き、偶像礼拝やバラモンの儀式化した祈りや、罪をしりぞけ、カースト制を否認している。一七世紀中ごろムガル帝国の圧迫に対抗して、シート教団は軍事的に組織されバンジャブを中心に王国を建設した。

シート族の運転手の一喝によって、ボニー曳きの連中がくもの子のように逃げてしまったのには驚いた。

三時三〇分グルマルグ発。山を下りかかった途中で遠くが晴れてきて、雪をいただいたナンガバルバット山(八二五メートル)が見えたことは好運だった。暫らくバスをとめてくれたのでカメラに望遠レンズをつけかえているうちにもうバスは動き出した。山の日

ーム」のところはシンコペーションになる。何回も何回もわれわれに向って叫ぶ。われわれはただ手をふって答えるだけ。シカラが三〇数艘も編隊を組んで通るといふのは余程珍しいことだったのである。この運河はジェルム川に通じている。ジェルム川はカシミールの盆地を西流しバキスタンに入って向を南に変え、ついにはインドス川に合流してアラビア海に注ぐ。運河を口の字型に廻ってまたものとダルレイクへ帰着したのは昼頃であった。

午後は希望者だけで絨毯の工場を見学に出かけた。帰途国営のマーケットで買物。中央広場では軍楽隊の演奏が行われていた。店はそのそばで方形で建物があり、そこに間口二間位に仕切られた沢山の店が並んでいる。木製品店、絨毯店、象牙やその他彫刻品の店、金属器のポットなどを売る店など専門店になっている。

八月十八日(火) JAIPUR

カシミールに来て今日で一週間になる。今日はカシミールを発ってニューデリーにもどる。九時、バスに乗ってスリナガルの街を通る。小中学生の登校する姿が見える。ティーチャーズカレッジは女性が多く、まっしろな制服はいかにも清潔な感じだった。坂をのぼって行く。もうすぐ、スリナガルの空港だ。一番機の到着がおくれる。九時四十五分の予定が、午後二時三十五分になった。ジェット機だから不安はない。三時五十分デリーの空港着、バスに分乗してデリーを出発したのは四時三〇分、一路南西方のジャイプールに急ぐ。約二五〇キロだ。六時四十五分、州境に着く。もう陽はとっぷりと西に沈んでいた。ここで通行税の計算のため三〇分間待たされた。七時一五分州境を過ぎるとラジャスターン(RAJASTHAN)であ



州境、これからRAJASTHAN州という表示。

る。ラジャスタンには「王の住む所」という意味で、独立前には二一のラージプートの藩王（クシャートリヤのカースト）が支配していたところである。藩王は政治・軍事にたずさわり、君主から封土を受け独自の階級を形成していた。今なお地主階級として大きな勢力をもっている。州を北東から南西に走るアラヴァリー山脈から北西部はバキスタンのシンド地方に及ぶタール沙漠で、年平均降水量二五〇ミリ以下の地である。山脈より南東部側は海拔三〇〇メートルをこえる丘陵地帯で降水量も五〇〇―九〇〇ミリ、キビ、小麦、マメ、綿などが作られる。

ジャイプールのランバー・パレス・ホテルに着いたのは一一時四〇分、元ラジャスターンの宮殿で豪華ではあるが停電で困った。疲れていたので深い眠りに入るのに時間を要しなかった。

（一九七五、二、三）

付記

この紀行文は全国地理教育研究会主催のインド旅行に参加した一九七〇（昭和四五）年の記録である。「インド紀行」八一では八月一日Calcutta着からGora, Nalanda, Rajgirを経てVaranasi (Benares), Sarnathを経て八月七日以降Khajuraho, Agra, Fatehpur, Sikriを経てNew Delhiまでを記した。八二〇本号ではKashmir滞在の一週間を紹介した。以後Jaipurへ行き、ふたたびDelhiにもどりAjanta, Elloraの石窟寺院を見学、八月二六日Bombayから空路帰国した。

